

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報 No. 47

The Bulletin of the Thomas Hardy Society of Japan

日
本
ハ
ー
デ
ィ
協
会
会
報

47

特別寄稿論文

- | | |
|--|-------------------|
| <i>The Well-Beloved</i> | 深澤 俊 1 |
| ‘Thy Soul Art Tender...’: Letters to Thomas Hardy from Japan | Oindrila Ghosh 10 |

論文

- | | |
|--|---------|
| 沼地と断章：『はるか群衆を離れて』における「場違いなもの」 | 土屋結城 27 |
| <i>The Hand of Ethelberta</i> における創作するヒロイン | 長田 舞 42 |

Synopses of the Articles Written in Japanese 55

書評

- | | |
|--|---------|
| Alan Manford, ed., <i>The Woodlanders</i> | 上原早苗 58 |
| Juliette Berning Schaefer and Siobhan Craft Brownson, eds.,
<i>Thomas Hardy's Short Stories: New Perspectives</i> | 永松京子 66 |
| 日本ハーディ協会会則 | 73 |
-

日本ハーディ協会
2021

二
〇
二
一

[特別寄稿論文]

*The Well-Beloved*¹⁾

深 澤 俊

かつて BBC のアナウンサーで、世界で一番美しい英語を話すと言われたマーガレット・ハワード (Margaret Howard) が、BBC を辞めて民間の FM 放送局に勤務しているとき、取材で東京まで来たことがありました。私のところにはジェイムズ・ギブソン (James Gibson) の紹介でハーディのことで取材に来たのですが、そのときマーティン・セイマー＝スミス (Martin Seymour-Smith) の分厚い著書『ハーディ』をプレゼントとして置いていきました。この本ではハーディの子ども時代から、*The Well-Beloved* が重要なテーマであると最初から書かれていて、興味を惹いたのです。

幸いなことに私が親しく付き合ったハーディ学者は、イギリスではジェイムズ・ギブソン、フランク・ピニオン (Frank B. [Francis Bertram] Pinion)、アメリカ人ではハロルド・オレル (Harold Orel) ですが、私も年を取りましたが、今ではこの人たちは皆故人になりました。これらの付き合いから、いろいろなことが思い出されますが、ロンドンに着いた日に鉄道の不具合でドーチェスターに着くのが遅くなって、サーン・アバス (Cerne Abbas) のギブソンの家に泊まったことや、私が勤務校の学生たちを引率して、シェフィールド大学の英語講座に連れて行ったときは、パブリック・スクールの典型的な校長タイプと言われていたピニオンが退職したあとでしたが、奥さんを介護施設に預けている時間帯に自宅に呼んでくれて、昼食を作ってくれたり、いろいろなお喋りをしたことなど、懐かしく思い出されます。

これからお話しする小説 *The Well-Beloved* は、『テス』や『ジュード』の大作に隠れてあまり目立たない作品に見えるのですが、かなり重要なテーマを

抱えた作品です。この小説の主人公で彫刻家のジョスリン・ピアーストン (Jocelyn Pierston) は結局、同じ島の出身のアヴィシ・カーロウ (Avicé Caro) に永続した魅力を認めることになって、アヴィシに三代にわたって執着しますが、その愛は最後には裏切られ、かつて結婚しそうになったミス・マーシア・ベンコム (Miss Marcia Bencomb) が年老いて、やつれた姿で現れたのと再会し、結婚するという結末になっています。

じつはここには、ハーディがどうしても作品に残しておきたかったメッセージが込められていると思われるのです。

ハーディの人間関係は土地と密接に結びついて書かれています。ハーディが描く地域は、一般的には古い地域名を使ってウェセックスと呼ばれていますが、それをさらに特殊化して、特定の人びとが長年にわたって住み続けた結果、独特の個性ある地域が存在しています。ハーディの作品のなかでもドーセット南部のポートランド (Portland) はスリンガー島 (Isle of Slingers) と呼ばれ、その特徴はさらに虚構化されて小説的な作品空間が出来上がってまいります。

スリンガー島の出身で 20 歳の彫刻家、ジョスリン・ピアーストン (Jocelyn Pierston) はロンドンから数年振りで帰郷して、恋人というよりも幼馴染みのアヴィシ・カーロウ (Avicé Caro) としばらく過ごして、アヴィシの親の反対もあって最後に会えない旨の手紙を貰ったあと、父から離れてロンドンまで同行することになったミス・マーシア・ベンコム (Miss Marcia Bencomb) に 5 ポンド貸し (ベンコムの父親とピアーストンの父親とは商売敵^{かたき}でしたが)、ロンドンに着くと二人はすぐに結婚話になるのですが、これはうまくいかず仕舞い。また親しかったアヴィシの方は従兄と結婚し、ミス・ベンコムは世界旅行に出かけることになります。ミス・ベンコムが去ったあと、ジョスリンは 25 歳から 38 歳まで自由に愛の世界に漂うことができたのです。愛の対象となる「恋の霊」(*The Well-Beloved*) はいろいろな形で彼の近くにいたのです。ピアーストンが 40 歳位のとき、父親がサンドボーンで急死します。ピア

ストーンはチャンネルクリフ伯爵夫人 (the Countess of Channelcliffe) の集まりでは元首相を見かけたり、二、三年前に結婚直後の夫を失ったニコラ・パイン=エイヴォン (Mrs. Nichola Pine-Aon) と会ったりの生活をしています。このパイン=エイヴォンとは、気まずい思いをしたりもします。しばらくして、アイリス・スピードウェル 夫人 (Lady Iris Speedwell) の食事会のとき、愛してくれていたのにピアーストンにその気がなかったアヴィシ・カーロウの死を知り、そのころニコラ・パイン=エイボンの魅力は消えてしまっていて、スリンガー島がもつローマ以来の時の重さをつよく感じたりするのです。

アヴィシの葬儀も終わり、ピアーストンはかつてアヴィシの家だったところに、兄弟と別れて一人で住んでいる 19 歳のアヴィシ・アン (Ann) ・カーロウ (二代目アヴィシ) を訪ねてみます。彼女は母親よりも詩的な感性は持っていないようでした。

ある日アヴィシ・アンについて教会に入ったところ、少し遠くにニコラ・パイン=エイボンの姿を見て不思議に思います。ピアーストンはアヴィシの部屋に明かりが付いているのを見て、シルヴァニア城 (Sylvania Castle) の自分の部屋に戻ります。

アヴィシ・アンはピアーストンに、あなたは私の好きな人の一人だけど、年を取り過ぎているのが気になると言います。ピアーストンは友人の画家ソマーズ (Somers) にこの洗濯女アヴィシ・アンはただ美しいだけではなく、「プラトンの言い方をすれば、その存在に望ましいものすべてである本質と典型の理念」²⁾ があるといって、明日結婚すると報告すると、ソマーズはうまくいくだろうと賛成してくれるのです。

ピアーストンが家に帰るとニコラ・パイン=エイボンの訪ねてきていて、自分はバドマス・レジス (Budmouth-Regis) から明日離れるというのです。ピアーストンはアヴィシを連れて、ロンドンのフラットに引っ越します。新しい土地の道のよく分からないアヴィシに切手を買いに行かせたとき、アヴィシはなかなか帰ってこなかったのですが、ネズミ取りも買ってきました。じつはこのアヴィシはアイザック・ピアーストン (Isaac Pierston) に求婚され、ある朝

密かに教会で結婚していたのです。その後アヴィシには、このアイザックと争いがあり、ある兵士と親しくなったりしましたが、すぐあとにピアーストンに連れられてロンドンに来たのでした。

一方、ソマーズとニコラは結婚することになります。

ピアーストンの努力もあってアヴィシの夫は戻って来ます。ピアーストンの方は父親が石材商人として金持ちになって引退し、ローマなどの滞在が多くなりますが、ここでアメリカ人の会話から、未亡人になったレヴェル夫人 (Mrs. Leverre) の名を耳にします。マーシアのことです。またスリンガー島のアヴィシの手紙から、夫のアイク (Ike) が石切場で事故死したことを知らされるのです。

20 年振りにピアーストンが島を訪れ、病気がちだったアヴィシに会いますと、「まあ、あなたはそのままなのね!」 ('Why—you are just the same!' p.232) と驚かれるのです。アヴィシの娘は、向かい側の城にガヴァネスとして住んでいるというのです。「彼がかれこれ 40 年間も関わってきた一族のふたりのアヴィシ。そのさらに新しい、最新版。彼女は貴婦人のようで——まずは優雅。姿は母親や祖母よりもまったく見事で、外観は年齢よりも女らしかった。」³⁾

これが三代目のアヴィシの描写ですが、40 年前にピアーストンにキスをしてくれたのは、イメージがまさに「この女」(初代アヴィシ) でした。その後、この三代目のアヴィシが岩の隙間に足を挟んでしまったとき、ピアーストンは靴を残して足を抜く方法で助けるのですが、この靴をピアーストンはあとで回収して、アヴィシの母親に届けに行ったとき、ピアーストンは娘と結婚して財産も残してやりたいと申し出ます。母親は娘の散歩に合わせるようにと提案し、娘の方では母親の結婚話かと思っていたこともあったのですが、病気がちの母の手伝いに来ていたアヴィシに食事のときに、ピアーストンは自分はあなたのお母さん、お婆さんとも身近になるほど年を取っているのだと言って、食事を早く切り上げて散歩に出ます。これを二代目アヴィシも気にして鉛筆書きの手紙をよこしますし、娘の方も気にするのです。

結局はピアーストンと娘アヴィシとの縁組みが決まって、ピアーストンはロンドンの仕事場を新しくしますし、アヴィシ親子をロンドンに招待します。お茶を飲んでいるときに、娘のアヴィシは泣いていたことがあったのですが、親子が島に帰り、ピアーストンがひとり島を歩いていると「一人のジャージーの男」(‘a Jersey man’ p.285) に会い、歩行を助けるために「自分のステッキ」(‘his walking-stick’ p.285) を渡してやります。

ピアーストンとアヴィシの結婚の直前に、アヴィシが話し合っている声がするのです。アヴィシはこの「サンドボーンのレヴェル氏」(Mr. Leverre o’Sandbourne)と別れるために本などを返すつもりでしたが、このレヴェル氏と結婚するために置き手紙をして家を出てしまいます。その衝撃もあって、病気がちだった母親のアヴィシ(Mrs. Pierston)は死んでしまいます。家を出た若い二人は舟で逃げるときにオールがなく、ハンカチや傘を燃やして合図をし救助されます。

10 月の夕暮れ、とくに付きそう人もいないので、ピアーストン夫人の遺体のそばでジョスリン・ピアーストンが見守っています。そこへローマで名前を耳にしたマーシアが、40 年振りに訪ねてくるのです。彼女はジャージー出身の恋人と結婚しましたが死別し、その恋人の息子が三代目アヴィシと駆け落ちをしてしまい、この二人は明日の朝、結婚するのだということです。

11 月、ピアーストンはロンドンの自宅で重い病気でした。アヴィシの葬儀はその前に雨のなか行われ、アヴィシとアンリ・レヴェル (Henri Leverre) が車で駆けつけて立ち去りました。このピアーストンをマーシアが心配して訪ねてきたのです。ピアーストンは知的にはなりましたが、美的感性は失われてしまい、アヴィシの美しさも思い出せなくなっていました。朝になってマーシアを見ると、「お婆さんになっていて、血色は悪く、しなびていて、額には皺がより、頬はこけ、髪は雪のように白かった」⁴⁾ のでした。「マーシア、きみは勇気があるね。歴史上の人物がもっている勇気だ。ぼくは今更愛せないけれど、心から尊敬するよ!」⁵⁾ とピアーストンは言います。もはや、美的な愛の問題ではないのです。

ピアーストンは健康が戻ると、車でスタジオの回りを案内します。そして「愛すべきもの(恋の霊)をもう見たいとは思わない」⁶⁾ と宣言するのです。建物の権利は処分し、翌年には美術院会員 (Academicians) の引退者に名を出すのです。マーシアとピアーストンは島で近所に住んでいましたが、人びとの意向もあって二人は結婚するのです。

アヴィシから手紙があって、アンリとは離婚したいと言ってきます。アヴィシが家にやってきたとき、見てくれが dark だとか fair hair だとかで争うことの意味のなさを論じ、後ほどアンリが来たときも、この違いへのこだわりを和解させます。「愛すべきもの」や理想像は消えてしまい⁷⁾、このあと島のウェルズ通り (the Street of Wells) の古い井戸を閉じて水道管から水を引いたり、湿気の多い家を換気のよいものに建て替えたりは、ピアーストンの費用で行いました。後に「故ピアーストン氏」(‘the late Mr. Pierston’) は「才能もあった人」(‘a man not without genius’ p.338) と言われたりもしているのです。

この作品は、何を言おうとしたのでしょうか? ここでは昔から同じような人間が生きてきた、スリンガー島の特殊性が強調されています。つまりウェセックスのような、ハーディが作品世界で作りあげた、「都会的」ではない場所の特殊性が輪を広げて強調されているのです。アヴィシはこの場所に相応しく、何代も持続する特徴を持った、このなかでも典型的な人物として描かれています。このような人物に、永遠性を追求しようという意識がピアーストンには湧くのですが、これはシェリーを代表とするひとむかし前のロマン主義の特質でしようし、それが 19 世紀初めには文学思潮として一つの時代を作ってきました。しかし、これが消滅する現象は、すぐあとの時代、19 世紀後半の大問題でもあるのです。この傾向のなかで、代々見かけが似ている状態で伝えられるアヴィシは、ピアーストンから見て時代から消えつつある貴重な存在でした。アヴィシ・カーロウは三代続けて、美しい姿を保っていて、そこに永遠性を発見したのがジョスリン・ピアーストンなのですが、このジョスリンの意識にはある種、追い詰められた感覚が見てとれるのです。理屈からすれば特殊なものは、一般的な平凡なものから離れた存在であり、

それが永遠性を持ち長続きするものと保証されているわけではありません。案の定、作者は、この三代続きが永遠性の保証どころか、不安定なはかなさの証であることを読者に示すのです。初代のアヴィシは昔ながらの無邪気なキスをして母親に咎められたのですが、三代目のアヴィシになると、母親の希望もあって、年を取ったジョスリン・ピアーストンとの結婚を承諾することになります。しかしこれは、自然な気持ちを抹殺して「永遠性」を実現しようという、無理な計画の実行でした。これは詰まるところ虚構にすぎず、アンリと三代目アヴィシの駆け落ちが自然な感情のレベルで起きて、崩壊してしまいます。アンリ・レヴェルはジョスリンが初代アヴィシから離れてロンドンへ行ったとき、たまたま同行してお金を都合してやったマーシアの、義理の息子でした。ジョスリンとマーシアは結婚する計画もあったのですが、マーシアの父親の反対などで実現しなかったのです。アンリとアヴィシの駆け落ちは二代目アヴィシの死をもたらしことになり、そこから進んで、ジョスリンとマーシアが結婚することになって小説は終わることになるのです。ものごとはいまよくいえない現実の悲劇性を作品に取り入れることによって、妥協を重視した結末となり、かなり意図的に作りあげた作品となっています。この状況のなかでジョスリンは細かいことは気にしない大らかな気分になって、冗談も言える心のゆとりを備えた人間になっていきます。

結論としてハーディは、アヴィシ的な美の理想像（‘the essence and epitome of all that is desirable’ p.171）に価値を見いだすのではなく、時間が経って頬はこけ、頭は白くなった、老化したマーシアに尊敬の気持ちを抱くように読者に訴えるのです。これは愛から出たものではないし、また商売で競い合っていたベンコム、ピアーストン両家の敵対心などは超越するものとして提示されています。その結果生まれるものは、近代的な水道工事であり、換気の悪い家の改良工事でした。つまり庶民的なレベルでの、実際的な社会改革で収まっていくのです。かつてアメリカのハーディ学者のカサグランデ（Peter J. Casagrande）はゲーテの『ファウスト第二部』の土地改良工事にも言及しながら、実用的な解決で終止符を打つハーディの行き方に注目していました。⁸⁾

この『ファウスト第二部』への言及は、カサグランデも認めるようにハーディの意向に従って書かれたところもあるのですが、ハーディ自身もゲーテ的な大きな国家的改良工事ほどの大きな意味を持たせる意図はなかったようなのです。カサグランデの言いたいことは、ハーディが自分の母親なり親族なりに連帯意識を持っていて、それが日常レベルの改良工事なり、故郷への回帰へと繋がっていること。セイマー＝スミスも言っているのですが、ハーディの晩年に頻繁に同行してハーディの作品の舞台を写真に記録したハーマン・リー（Hermann Lea）は、プロの文芸批評家と違っているからこそ、ハーディと話が合ったという事実を語っています。これがハーディの感覚に近いもので、ジョスリンがアヴィシやマーシアに向かうのは、この一般的な連帯意識が濃厚なためということなのでしょう。たとえアヴィシのなかに「永遠的な」価値を見いだしたとしても、それがシェリー的な絶対的な価値に高められるのではなく、老化などを踏まえても容認できる価値の発見にこそ意味を見いだしているのです。これこそが、ロマン主義崩壊以降のハーディのモダニズム的妥協なのでしょう。人生というものは、結局はそういう落ち着き方をするものだという、ある程度悲劇的なハーディの達観した人生観から出たものと言えるのです。

註

1) Thomas Hardy, *The Well-Beloved: A Sketch of a Temperament*. (London: Macmillan & Co Ltd, 1958)

2) the Idea, in Platonic phraseology—the essence and epitome of all that is desirable in this existence. (p. 171)

3) a still more modernized, up-to-date edition of the two Avices of that blood with whom he had been involved more or less for the last forty years. A ladylike creature was she—almost elegant. She was altogether finer in figure than her mother or grandmother had ever been, which made her more of a woman in appearance than in years. (p.237) It was Avice the Third. (p.238)

4) an old woman, pale and shrivelled, her forehead ploughed, her cheek hollow, her hair white as snow. (p.329)

- 5) 'Marcia, you are a brave woman. You have the courage of the great woman of history. I can no longer love; but I admire you from my soul!' (pp. 329-330)
- 6) 'Well-Beloveds—I want to see them never any more!' (p.331)
- 7) the extinction of the Well-Beloved and other ideals (p.338)
- 8) Peter J. Casagrande, *Unity in Hardy's Novels*. The Macmillan Press Ltd. 1982. p.157.

‘Thy Soul Art Tender...’: Letters to Thomas Hardy from Japan

Oindrila Ghosh

It was an initial curiosity about Thomas Hardy's global, specifically Indian, correspondents which gradually transmogrified into a research question during my visits to Dorchester in 2016 and 2019.ⁱⁱ At the Thomas Hardy Archives, then housed at the Dorset County Museum and later temporarily shifted to the Dorset History Centre, while reading the well-preserved and unpublished correspondences to Hardy (which have now been digitised by the University of Exeter under a Project headed by Professor Angelique Richardson), that some of my questions were finally answered. The research unearthed letters from Japan, China and Syria apart from those from India, which I was seeking. On a close scrutiny one is able to locate diverse kinds of correspondents who wrote to Hardy for various purposes—for seeking guidance in research, for permissions to publish selections from his work in India, or seeking reviews of their own work composed in the English language, seeking audience with him at Max Gate or even his views on their Country.

The contents of these letters from his Asian correspondents may sound ordinary in their import as mere requests from fans to a celebrated author, and may not immediately contribute meaningful extra-textual perspectives on his published works, however they do open up a vital portal for researchers in Asia who have/ are still trying to fathom the depth of Hardy's influence upon his readers, when he was still a living legend. Though research on the translations of Hardy's novels in Asia fixes the period of contact between the writer and his larger Asian readership (through vernacular translations) to as late as 1930s the letters reveal a much earlier period of exposure to, and reverence for, Hardy's work, among Asian academics and

readership, who was, then, a contemporary legend for them. The letters thus, make many important points about the state of Asians as readers, researchers, teachers of English Literature (which back in the early-twentieth century was mostly restricted chiefly to canonical British literature) or even as Colonial subjects under the British Crown, as was in the case of India. Shafquat Towheed in his essay 'Negotiating the List: Launching Macmillan's Colonial Library and Author Contracts', says:

In many senses, Thomas Hardy presents perhaps the most uncomplicated itinerary in Macmillan's Colonial Library list. He was one of the first major novelists to be contacted by Macmillan about the new colonial edition even before the scheme had been formally launched (137)

In fact this essay goes on to enumerate how the Macmillan Colonial Library editions actually made Hardy immensely popular in the British colonies, many years after he left off writing novels:

what is also evident is that despite his public withdrawal from the field of novel writing, Macmillan was confident that his work would continue to sell in the British and colonial markets for years to come. (140)

Of course Japan was never a British colony and yet the influence of and admiration for Hardy in Japan is worth arousing curiosity in the Non-Japanese fans of Hardy and makes it worth exploring.

Hardy's Japanese Correspondents: A Case of Five Letters

Having written on Hardy's Indian correspondents extensively elsewhere, this present essay seeks to share the pleasant discovery of letters to Hardy from Japan. It was certainly not surprising to find several letters written to Hardy from Japan, as one is aware that Japan had established a Thomas Hardy Society even earlier than the one in the UK, as early as in 1957. Saburo Minakawa in 1965 had brought out a book,

Appreciation of Thomas Hardy's Works in Japan. In fact it was in the 1890s when Hardy's works were introduced in Japan. Evidence (from an essay 'A Note on Hardy and Tōson' by Juro Suzuki in *Comparative Literature Studies*, Vol. 20) indicates that Hardy was introduced relatively early in the Meiji period in Japan, and subsequently he apparently ranked second only to Shakespeare in the number of books of research and criticism devoted to his works.

Out of the five Japanese correspondences which I discovered, the one from a Newspaper 'The Hochi Shimbun' offers the most interesting read in relation to Hardy's impact on Japanese culture:



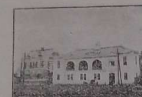
THE "HOCHI SHIMBUN"
The Oldest News Paper in Japan.

TELEGRAMS, "HOCHI" TOKIO.

Telephone	
268	Honkyoku
2033	"
3335	"
1608	"
1209	"
3431	Osaka
1765	Kyoto

Tokio, June 8th 1907
Mr. Thomas Hardy,
Dear Sir:-

I venture to think that the name of our paper "the Hoichi Shimbun" is not a stranger to any persons interested in Japan. The paper is Count Okuma's organ and has a circulation of a quater million. Our readers take great interest in knowing the feelings and opinion in Christendom towards Japan and her people. We have already commenced to publish replies which had been sent to us in response to our first appeal which was very timidly made at that time. Tha readiness and promptitude with which our first appeal has been responded to, encourages us to make second attempt on a larger scale. What we want is not mere complimentary expressions unsupported by sincerity. Frank, honest and straightforward expressions of opinion on things Japanese are exactly what we want. Any criticism made in a friendly spirit will receive a hearty reception. I must trespass too much on your valuable time



THE "HOCHI SHIMBUN"
The Oldest News Paper in Japan.

TELEGRAMS, "HOCHI" TOKIO.

Telephone	
268	Honkyoku
2033	"
3335	"
1608	"
1209	"
3431	Osaka
1765	Kyoto

Tokio, 1907

Our proprietor, Mr. K. Mineura is the Vice President of the House of Representatives of the Imperial Diet.

Ans.
Max Gutz Dorchester
Aug. 13. 1907

Dear Sir: I am unable to express a well-defined opinion on Japan & her people. I can only express a hope, which is that your nation may not become absorbed in material ambitions masked by throatbone convention like the European nations & America, but that it may develop an enlightened spirituality that shall become a shining example.

Yours very truly
T. H.

Image Courtesy: Photographed by the author with permission from The Dorset County Museum and the Dorset History Centre, June, 2019.

Having researched into the background of this newspaper I found that it was originally called Yubin Hochi Shimbun, founded in 1872 by Maejima Hisoka, an important Japanese statesman, politician and businessman. The newspaper simplified its name in 1894 to the Hochi Shimbun and acted as an important Meiji-era government-sponsored newspaper. The letter highlights its role in furthering Japan's establishment of links with other cultures, in the first decade of the twentieth century, and the appeal for a critical appreciation of Japanese culture from Hardy, draws the most striking reply from the author:

Dated 13th August, 1907:

“ I am unable to express a well-defined opinion on Japan & her people. I can only express a hope, which is that your nation may not become absorbed in material ambitions masked by threadbare conventions like the European nations & [A]merica, but that it may develop to an enlightened spirituality that shall become a shining example...”

Revealing, thus, Hardy's abhorrence for rising materialism and the pitfalls of self-aggrandizement, which were to prove prophetic in the culminating Great War of 1914-1919. Hardy's words were, hence, perhaps, ironic since Japan entered the Great War too on the allied side only seven years after this! This letter, like several others, from Hardy's Global correspondents explores the significance of cultural dialogues and his objection to imperialism and patriotism.

In 1913, writes a student from Japan to Hardy, H. Nagaoka, who on receiving an opportunity to study in Britain, feels that it is going to be an incomplete trip without 'paying homage' to the writer personally. The usage of the words 'homage' and 'pilgrimage' are important in assessing the relationship that his Japanese readers and fans had mentally established with this reclusive author! This deep admiration for Hardy and his works in the Japanese, at first is a capable of intriguing a researcher or reader. However Suguru Fukasawa's essay 'Letter from Tokyo' clears

several of these doubts and queries, Fukasawa writes:

Thomas Hardy was well read in Japan especially from about 1910 to 1960. Hardy was a contemporary and a new writer to us then. Hardy's short stories were suitable for our English text books for senior High Schools. The gloomy atmosphere and the tragic characters were just right for us in those depressing days (80).

George Stevens Cox too has an explanation for the intense connection that Hardy's earliest Japanese readers made with his works, which Fukasawa quotes at length:

[Their] cultural heritage enables the Japanese to appreciate the Wessex class system and its austere demands on some characters. The sad history of the d'Urbervilles and Tess's heroic self-sacrifice for her family's sake are themes readily intelligible to the Japanese. . . . Japan had suffered for centuries from harrowing natural disasters—earthquakes, typhoons, fires—and in the face of these remorseless aspects of an unbenevolent Nature, the Japanese have developed stoical attitudes towards Fate, and the remorseless laws of cause and effect. These attitudes and their Confucian and Buddhist expression are very close to Hardy's concept of an unfeeling Mover. (Cox qtd. in Fukasawa 80)

Temperance Hotel,
South St.
Dorchester,
Sep. 17, 1913.

Dear Sir,

As a student and admirer of your excellent novels, I am now staying here to study the topography of your novels. Even while I was in Japan, your works were my favourite reading, and when I was ordered last year to come to England for study, the most important item on my programme was to pay a pilgrimage to your country. But I feel my pilgrimage would not be completed until I have paid my personal respects and

thanks to the creator of so many charming and delightful creatures.

If you could kindly give me the privilege of shaking hands with you, I should consider it the greatest honour. If you could not, please accept the best respects and thanks from

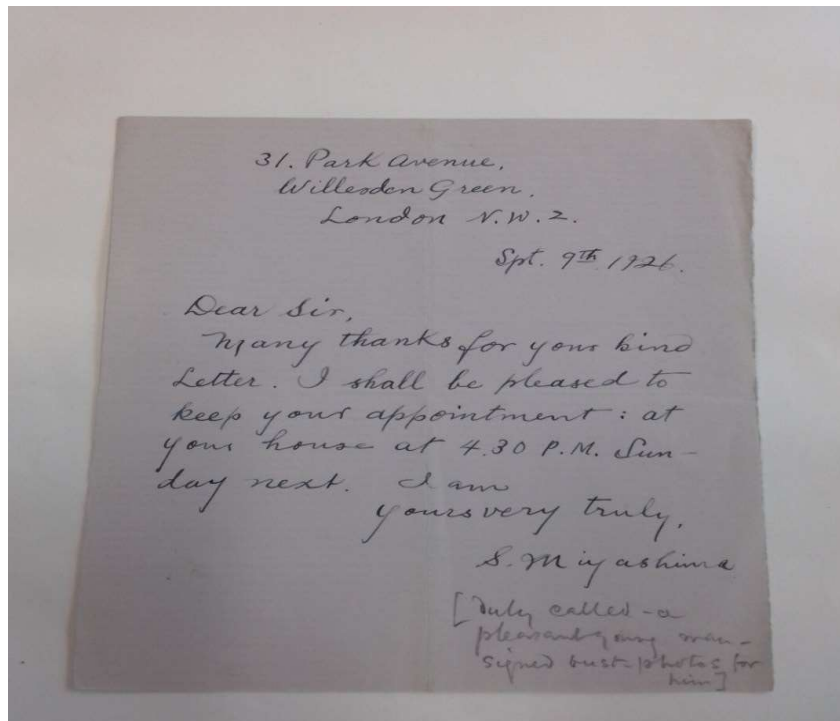
one of your admirers,
H. Nagasaka.

Thomas Hardy Esq.
Max Gate,
Bournemouth.

Image Courtesy: Image Courtesy: Photographed by the author with permission from The Dorset County Museum and the Dorset History Centre, June, 2019.

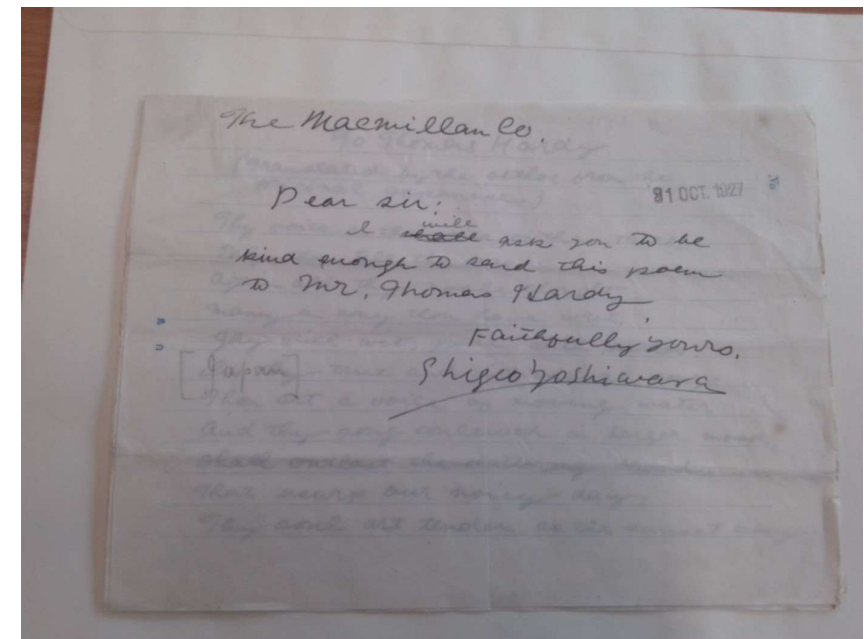
The next letter from S. Miyashima, dated September 9th, 1921, is interesting because appeals for visits and seeking audiences with Hardy, were often not entertained, as he was a reclusive man. This reply to possibly an earlier communication reveals that Miyashima had received an invitation to visit Hardy at Max Gate after all! It is, however, the acclaimed author's pencil-note on this letter which makes a researcher curious about the nature and personality of the correspondent and visitor who could draw such approbation from Hardy! The note says:

Duly called—a pleasant young man—signed bust photos for him.



The admiration which readers, poets and writers of a generation younger to Hardy had for his work, be it the British poets of the First World War as—Owen, Blunden or Sassoon—or the rebellious, modernist 'Kallol' poets in far off Colonial Bengal (Ghosh 39), is a thread which seems to bind his young Japanese readers and imitators to him too.

Instances of cultural exchanges and letters from Japanese readers and fans, sharing literary pieces or asking for audience, seem to have been a regular occurrence with Hardy, which he often reciprocated or responded to. A letter from Shigeo Yoshiwara, dated 31st October, 1927, was sent to Hardy via Macmillan Publishers, possibly because the author did not have Hardy's address, translates his own poem from the Japanese into English. The poem goes thus:



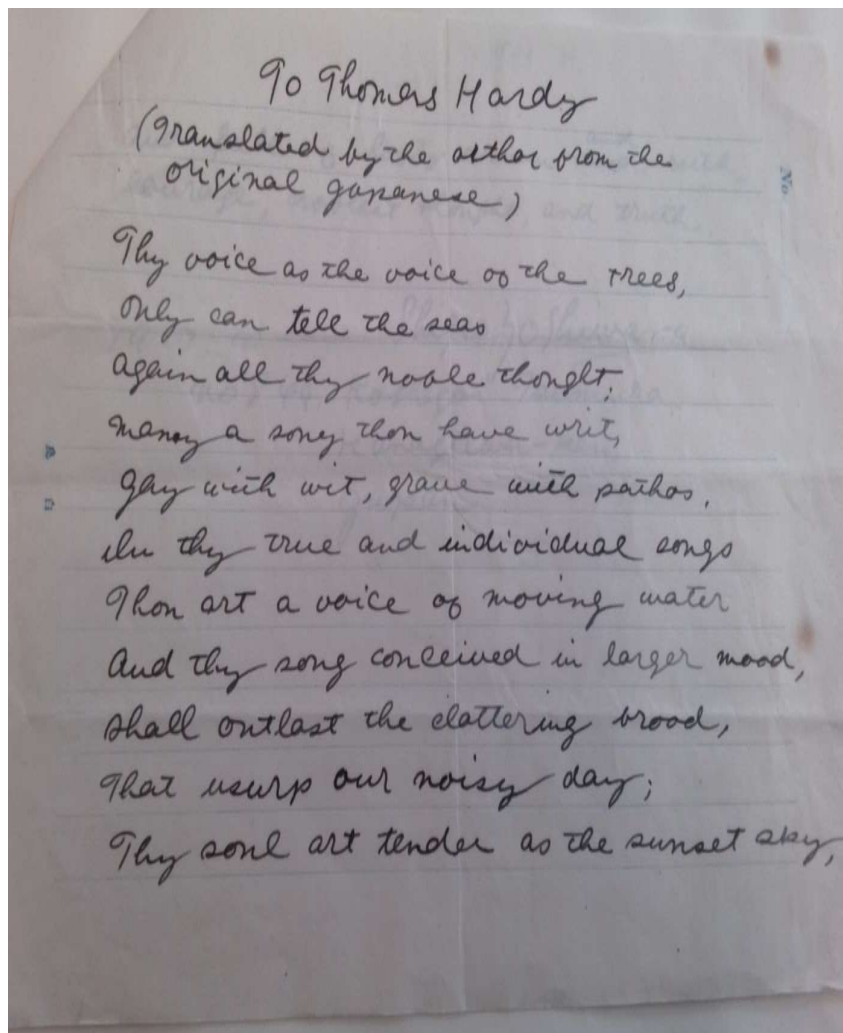


Image Courtesy: Photographed by the author with permission from The Dorset County Museum and the Dorset History Centre, June, 2019.

To Thomas Hardy

(Translated by the author from the original Japanese)

Thy voice as the voice of the trees,
Only can tell the seas
Again all thy noble thought,
Many a song thou have writ,
Gay with wit, grave with pathos.
In thy true and individual songs
Thou art a voice of morning water
And thy song conceived in larger mood,
Shall outlast the clattering brood
That usurps our noisy day;
Thy soul art tender as the sunset sky,
And full of lofty dream and with,
Courage, noblest thought, and truth.

It is interesting that this correspondent wishes his favourite writer to glance through his dedicated poem, and there is no other expectation or request attached to the letter. This clearly evinces the significant impact of Hardy on Japanese readers and writers, even during the author's life time. The next letter too, from one T. Hidaka, also wishes to seek audience with Hardy, during his stay for educational and cultural enrichment in England:

TELEPHONE.
HAMPSTEAD 3223.

98, KING HENRY'S ROAD,
Hampstead, London, N.W.3.

April 28, 1922.

Dear Thomas Hardy Esq.:

I am very sorry that I have no friend to introduce me to you, and though I know it is very rude to write to you without any one's introduction, my heart to you has compelled me to commit this rudeness; will you kindly excuse me for it?

I have come here from Japan to study the English literature, especially the background of it; and so the beginning of next May, I will visit your native district to study the background of your

H. 3425

great literature. And now I am very anxious to see you, it being my great desire since I began to be attracted by your deep works.

If you permit me to call on you, it is great joy to me.

Longing to see you, and carrying this letter its journey and destination,

With my best wishes,

I remain

Sincerely yours

T. Hidaka

Image Courtesy: Photographed by the author with permission from The Dorset County Museum and the Dorset History Centre, June, 2019.

With no reply to this letter available one is hardly able to surmise if this young man was able to fulfill his wishes!

The letters from Japan which I incidentally discovered, while sifting through Hardy's Global correspondences to locate letters from his Indian fans and admirers, may not by any means be exhaustive, and there could be further letters of interest worth discovering for interested scholars, critics and researchers on Thomas Hardy in present day Japan. It is in the spirit of this excitement, of sharing a discovery, which might ignite further interest in readers and admirers of Hardy in Japan, who perhaps would make more of these letters than I am able to, to look for more interesting letters, ideas and bridges between them and the Old Master! Any such forays into these correspondents/correspondences shall be eagerly awaited for by the author of this essay..

Note

i See Ghosh, Oindrila. 'Discovering Thomas Hardy's Indian Correspondents' in *The Hardy Review*, ed. Rosemarie Morgan 16 (2), 2014.

ii The Research was funded by the Charles Wallace India Trust, UK and permissions for handling the manuscripts were granted by Dorset County Museum and the Dorset History Centre between May-June, 2019. The Honorary Curator of the Hardy Archives, Ms Helen Gibson was instrumental in mentoring my research from 2016-19.

Work Cited

Towheed, Shafqat. 'Negotiating the List: Launching Macmillan's Colonial Library and Author Contracts'.

John Spiers ed. *The Culture of the Publisher's Series: Nationalisms and the National Canon, Volume 2*.

Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011. pp. 134-151. Print.

Ghosh, Oindrila. 'Thomas Hardy's Calcutta Connection: One Letter and Many Regrets.' *The Hardy Society Journal*, vol.12, no.2, Summer, 2020, pp.37-42. Print.

Fukasawa, Suguru. 'Letter from Tokyo.' *The Hardy Society Journal*, vol. 1, no. 2, 2005, pp. 80-83. Print.

Suzuki, Juro. "A Note on Hardy and Tōson." *Comparative Literature Studies*, vol. 20, no. 1, 1983, pp. 44-47.

Print.

[Dr. Oindrila Ghosh: Associate Professor of the Department of English at Diamond Harbour Women's University in West Bengal, India]

沼地と断章： 『はるか群衆を離れて』における「場違いなもの」

土屋 結城

1. 序

ノーマン・ページ (Norman Page) が述べるように、トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の多くの小説には “a strong sense of community”(84) が描かれ、登場人物たちはおおまかに “insiders” と “outsiders”、すなわち「生まれや育ちの面で (知識、忠誠心の面でも) 共同体に属している者たちと、他の場所から来たよそ者」(84) に分類することができる。初期の作品である『はるか群衆を離れて』(*Far from the Madding Crowd*) も例外でなく、物理的にも社会的にも比較的閉じられた共同体を舞台にして、外部からの人の移動をきっかけに物語が展開する。

そのように物理的、社会的な境界が明示的である作品において、位置づけが曖昧な場所として “swamp” が描かれる。¹ 作中ではこの場所は “malignant” で “a nursery of pestilences small and great” (296) ² のようだと描写されるが、原稿の段階では “It was indeed beautiful.”(394) との言葉も見られ、相反する評価を与えられている。生態学と文化史の両方の側面から沼地を含む湿地全般を考察したロッド・ギブレット (Rod Giblett) は、“Wetlands are out of place in all the major Western categories of matter: solid, gas, heat/light, and liquid. They are dirt in Douglas’s . . . sense of ‘matter out of place.’” (ch.3) とその特徴を述べている。ここで言及される Douglas とは人類学者メアリ・ダグラス (Mary Douglas) のことであり、“They [wetlands] are dirt” と述べている文は、ダグラスが著作 *Purity and Danger* において、“dirt” とは “matter out of place” (場違いなもの)(44) であるとした定義をもとにしており、湿地というものが分類困難な場所であることを示唆している。

比較的閉じられた共同体を舞台にしている作品において、“out of place” と評される場所に対する登場人物たちの態度に着目することにより、彼らの共同体での位置を改めて考察することができるのではないか。本論考ではその考えに則り、『はるか群衆を離れて』における沼地の表象を分析する。その際、断章となった未発表原稿に書かれたいわゆる “The Sheep-Rot” の章も考察の対象とする。³ この章では、沼地を舞台にゲイブリエル・オウク (Gabriel Oak) とフランク・トロイ軍曹 (Sergeant Frank Troy) が作品における役割を象徴するようふるまいをする。オウクもトロイも人物造形において曖昧さが残る人物であるため、この章の分析が2人についての理解を深める一助となることが期待される。本論考では、まず “The Sheep-Rot” の位置づけを確認するために、出版された『はるか群衆を離れて』の第44章における沼地の表象とバスシバ (Bathsheba) の関連を分析する。その際、バスシバが沼地に対して抱く嫌悪感の源に当時流行した疫病があることを指摘する。そして、その分析を踏まえ、“The Sheep-Rot” の章でオウク、トロイそれぞれが沼地に対してどのような態度を示していたかを読み、沼地が共同体にとって「場違いなもの」であった点を指摘し、それが同様に「場違い」な存在であるトロイの読み直しにつながる可能性を提示する。

2. 疫病の温床としての沼地——バスシバとの関連から

沼地は、第44章 “Under a Tree: Reaction” において詳細に描かれる。直前の第43章においてバスシバが、ファニーの死を知った夫トロイから “You are nothing to me. . . . I am not morally yours.” (293) と冷たくあしらわれ、家を飛び出した後、外で一夜を過ごす場面である。⁴

There was an opening towards the east, and the glow from the as yet unrisen sun attracted her eyes thither. . . . But the general aspect of the swamp was malignant. From its moist and poisonous coat seemed to be exhaled the essences of evil things in the earth and in the waters under the earth. The fungi grew in all manner of positions from rotting leaves and tree stumps, some

exhibiting to her listless gaze their clammy tops, others their oozing gills. . . . The hollow seemed a nursery of pestilences small and great, in the immediate neighbourhood of comfort and health, and Bathsheba arose with a tremor at the thought of having passed the night on the brink of so dismal a place. (296; 強調筆者)

この場面では、美しく見える緑地が、嫌悪感を催させるキノコや腐敗する葉に覆われている沼地と隣接していることにバスシバが気づく。バスシバの視点から語られているが、“the general aspect of the swamp was malignant.”以降の評価は、語り手のものとも考えられ、バスシバと語り手の両者ともに沼地に対する嫌悪感を共有しているという解釈も可能である。

リンダ・M・シャイアーズ (Linda M. Shires) はこの場所を “womb-like haven” (“Narrative” 173) ないし “womb-like place” (Introduction xxv) と呼んでいるが、これは、第 28 章において、くぼ地で行われたトロイの剣の舞が “a kind of symbolic rape” (Carpenter 342)、あるいは “obviously a brilliantly written paradigm of sexual intercourse” (Beegel 212) と評されることに呼応し、沼地をバスシバのセクシュアリティの象徴とする見方である。スーザン・ビーゲル (Susan Beegel) も同様の捉え方をしており、この場面については “Contact with Troy has turned the novel’s feminine space, and Bathsheba’s perception of her own sexuality, into a ‘loathsome, malignant thing.’” (213) であると解釈している。一方、先にも引用したギブレットは沼地を含む湿地全般を “they [wetlands] are the moist womb that gives birth to new life.” (ch.1) と評しており、湿地を過度に女性化している点には注意が必要だが、シャイアーズ同様、子宮にたとえる比喩を用いている。シャイアーズは性行為との関連で沼地を子宮にたとえているが、ギブレットの比喩は、生命を生み出す場所としての子宮に焦点を当てており、「湿地が地球上の生命にとって重要な場所である」(ch.1) ことを強く訴えている。

そのように生命を生み出す場所でもある肥沃な沼地をバスシバや語り手が “malignant” であると感じる要因の一つに、19 世紀イギリスの社会状況から

生み出された感性を挙げることができよう。上記の引用においては沼地が “a nursery of pestilences small and great” である要素として “The fungi” と “rotting leaves” を挙げていることと、“exhaled” という語の選択からして、疫病の原因は有害物質を含む瘴気(miasma)にあるとする「瘴気説 (miasma theory)」の影響を読み取ることができる。

疫病の中でも特にコレラは 19 世紀初頭から繰り返しイギリスを襲っており、1854 年にはテムズ川からの “Great Stink” と呼ばれる臭気とともに発生し、大規模な被害を引き起こした。そして 1861 年には、アルバート公が腸チフスで亡くなっている。これらの疫病の原因として 19 世紀イギリスにおいて有力だった説が「瘴気説」である。しかし何が瘴気を放出するのかについてはさまざまな説があった。

古代ギリシアにおいては、ヒポクラテスがある種の熱病の原因として、水はけが悪く空気がよどんでいるような湿地を挙げていた (Halliday, ch.6)。これは主にマラリアとの関連によるものと思われる。時代を下って 19 世紀イギリスの状況に目を転じると、当時「瘴気説」の擁護者だったウィリアム・ファー (William Farr) が報告書においてコレラの原因物質についての仮説を列挙しているが、その中の一つに “fungus” を原因とする説がある。

In the autumn of 1849, Dr. Brittain and Dr. Swayne, of Bristol, considered that they had discovered the cause of cholera in a minute fungus; and Dr. W. Budd, of the same city, met with the supposed fungus in various specimens of water used as drink, in places where the cholera was very prevalent. (126)

この説はほどなく否定され、その後に有力になるのが、腐敗した有機物を原因とする説である。この説は根強く支持され、ロンドンの衛生状況について 1842 年に報告書を発表したエドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick) は、コレラの原因について次のように述べている。

the various forms of epidemic, endemic, and other disease caused, or aggravated, or propagated chiefly amongst the labouring classes by atmospheric

impurities produced by decomposing animal and vegetable substances, by damp and filth, and close and overcrowded dwellings prevail amongst the population in every part of the kingdom (369; 強調筆者)⁵

腐敗する有機物が瘴気を生み出すと考えられていたことがわかる一文である。この考えの影響はジョン・ラスキン (John Ruskin) が1860年に出版した *Modern Painters* にも見られる。ラスキンは物質の(不)純度について論じている箇所、以下のように述べている。“The fermentation of a wholesome liquid begins to admit the idea [of impurity] slightly; the decay of leaves yet more; . . . and the foulest of all corruption is that of the body of man” (205-06; 強調筆者)。これらの報告書や文章に見られるような、沼地、キノコ類(菌類)、腐敗した有機物を嫌悪する感性は瘴気をめぐる言説によって涵養されたものだと言える。⁶

しかし、農村においては腐敗する有機物が緑地や森を豊かにする肥料となることもまた事実である。バスシバの小間使い兼コンパニオンであるリディ(Liddy)は、“You can’t come across” (297) とのバスシバの心配をよそに “It will bear me up, I think.” (297) と答え、“Liddy did not sink as Bathsheba had anticipated, but landed safely on the other side” (297) と、この湿地を特に問題なく横切ってくる。バスシバとリディの沼地に対する態度が対照的に示されている箇所である。

バスシバが抱いた嫌悪感は、リディに比べれば相対的にはよそ者の、さらに言えば、農村地域の自然に馴染みのない “townsfolk” (63) にして “a late comer to the place” (214) のものである。その眼には、腐敗する有機物が疫病の温床に見えるのである。沼地は、都会の住人にとっては瘴気を吐き出す(ように見える)脅威であっても、農村の住人にとっては自然の風景の一部に過ぎないのだ。

3. コントロールすべき沼地——断章とオウクとの関連から

沼地は、先述したように断章となった未発表原稿 “The Sheep-Rot” の舞台ともなっている。この未発表の章についての研究は少ないが、⁷ オウクとトロイについて示唆に富む描写が見られ、近年ではアナ・ウェスト (Anna West) が注目している。⁸ “The Sheep-Rot” の章にはハーディの “self-borrowing” (Morgan, “Appendix II” 402; Schweik 347) の習慣が見られると指摘されているように、章内のいくつかの描写が『はるか群衆を離れて』の他の箇所に流用されたため、一見すると作品内の複数箇所からの描写のパッチワークのようである上、推敲が最後まで成されなかったため詳細を読み取りづらい箇所もあるが、“The Sheep-Rot” 自体で独立した1つのエピソードを成しており精読に値するだろう。

内容は以下の通りである。オウクが、ウェザーベリー・アッパー・ファームで働き始めてまもなく、一部の羊が急に肥えてきていることを怪訝に思っ て調べると、羊たちが人為的に “sheep-rot”、つまり寄生虫によって生じる病気にかかるように仕向けられていたことに気づく。誰が羊をわざと病気にする “trick” (395) を仕掛けているのかを探るために、オウクは “After supper he took a sheepskin from a nail behind his door rolled it under his arm, & crossed Great Ewelease almost—down to the lower corner. Here he rolled himself up in the sheepskin & lay down under the hedge.” (395) と羊の皮をかぶって生垣の下に身をひそめて見張り、それがトロイの仕業であることを発見する。“sheep-rot” は一時的に羊を肥えさせるため、高値で売ることを目論んだトロイが意図的に羊を “sheep-rot” にしようとしていたのである。そして2人の間で殴り合いが起きるといふ顛末が描かれる。

この章でのオウクとトロイの行為は、まさに作中の2人の立場を象徴していると言える。オウクは、先行研究において “deep sympathy with the world of nature” (Squires 311) を持っており、自然と一体化した “the agricultural god” (Stave 41) のような存在であると指摘されるが、その彼が羊の皮をかぶり文字通り自然と一体化する一方で、“trickster” (222, 224) のトロイはその面目躍如

とばかりに羊を病気にさせる “trick” —— 沼地をいったん水浸しにし、その後少し水を排出したところに羊を招き入れ、寄生虫が含まれる草を食べさせ、病気にさせる —— を仕掛けています。

沼地についての態度に目を転じると、語り手は夕日を受けている沼地を “it was indeed beautiful to look upon” (394) と描写するが、オウクは、“The attempt to convert it into a small water-meadow by introducing a running stream had been virtually a failure.” (395) であったため、次の引用にあるように、この地の水を抜くべきだと考えている。⁹

Oak's thought was that this was a spot which would indeed rot a sheep, or a thousand sheep, in a very short time, & he thought that if those rotted the other day had only got in there, the cause would be accounted for. The corner was a nuisance—a nursery of pestilences small & great—and it was to be drained. (394-95)

沼地をバスシバの子宮の象徴だと考えると、この行動はどのように解釈できるだろうか。イヴァン・クレイルカンプ (Ivan Kreilkamp) は、オウクを “a caretaker and giver of life” (476) と評しており、彼が羊を救った点においては、確かにその通りであると言える。一方で沼地を有用な water-meadows に変えられなかったからといって排水しようとしている点を象徴的に捉えると、バスシバのセクシュアリティが生殖と結びつかない場合、そのセクシュアリティを枯渇させる行為でもあるように読み取れ、オウクのセクシュアリティが “life-affirming” (Beegel 219) であるとのビーゲルの評価に疑問符がつく。オウクがバスシバを抑圧する存在になる可能性は先行研究においても指摘されており、モーガンは、彼がバスシバを “nullif[y]” (*Women* 57) させる存在であると断じ、シャイアーズは 2 人の結婚が、バスシバの “a patriarchal prison-house” への “recuperation” である側面を指摘している (“Narrative” 176)。オウクの沼地に対する態度はこれらの読み方を裏づける。

4. 金を生み出す場所としての沼地——トロイとの関連から

沼地の近くには、water-meadows 化計画の名残で、水と呼び込むための水門(hatch)がついている。トロイは、この水門を利用して水を流し入れ、沼地を水浸しにする。この場所がバスシバの子宮の象徴だとすると、第 46 章のガーゴイルの場面についてビーゲルが述べたように、彼の “malignant, destructive outpouring” (215) であるセクシュアリティの表れか、シャーリー・A・ステイヴズ (Shirley A. Staves) が述べているように、“Troy's sexuality destroys what it touches.” (39) の表れであるように見える。

また、羊をわざと病気にさせて太らせるという行為は、トロイが二人の女性に行ったことの反復とも考えられる。トロイは二人を恋煩いにさせ、ファニーに関しては妊娠させ——文字通り太らせ——、バスシバに関してはその欲望を増大させた。このように、“The Sheep-Rot” の章でのトロイの行為——沼地を利用して羊に寄生虫由来の病を与えようとする行為——は作中でのトロイ像を象徴しているようである。特にバスシバとの関係で考えると、トロイ自身がバスシバに寄生していたとも考えられるため、ウェストはトロイの行いが「彼のバスシバに対する態度、そして二人の関係に対する態度を反映している」(ch. 2)と指摘している。このように、トロイはバスシバを、さらにはウェザーベリーを破滅させる存在であるように描かれている。

その読みを裏付けるように、“The Sheep-Rot” の章では、トロイの行動に秩序を攪乱するとされるトリックスターの片鱗が見られる。¹⁰ 以下の引用は、トロイの行為を発見したオウクと交わしたやり取りである。病気の羊を出荷することにより、それを食すロンドンの人々に害をなすことになると責めるオウクに対して、トロイはロンドンの人々は自分たちとは関係ないと言い、さらにはフォアグラなどを例に出して開き直る。

Besides we send 'em to the market, & the dealers send 'em to London—and the people who eat them are nothing to us.

Tis as much harm to hurt people you don't know as people you do.

Not at all. And Londoners have a taste for such things. They deliberately

choose the diseased livers of poultry as delicacies & call them pâtés de foie gras with watering mouths.

Oh— (396-97)

先にも述べたように、この沼地はキノコや腐敗した葉など瘴気を吐き出すと考えられていたものが充満している疫病の温床と描写されていた。オウクもこの場所の水を抜く必要があると考えていた。だが、トロイはその場所を利用して羊を病気にさせ、肥えさせ、高値で市場にそしてロンドンの住人に売ろうと企てた。換言すれば、トロイは有害物質のある場所から金を生み出すとしていたのだ。

しかし、そもそもコレラの原因となる有害物質を金に変える計画はロンドンの住人たちが提案していたものであった。先に挙げたチャドウィックやヘンリー・メイヒュー(Henry Mayhew)は、ロンドンから出る廃棄物を田舎で肥料として使うプランを提案していた。チャドウィックは、先に引用した報告書の中で、“decomposing refuse”について“refuse when thus held in suspension in water may be most cheaply and innoxiously conveyed to any distance out of towns, and also in the best form for productive use, and . . . the loss and injury by the pollution of natural streams may be avoided.” (370) と述べており、ロンドンでは有害な廃棄物を田舎では肥料として使うことができると提案している。メイヒューはさらに踏み込んだ主張をしており、ロンドンで排出される糞尿は病気の原因となるため、田舎に運び出して肥料として用いることを提案している。“The removal of the refuse of a large town is, perhaps, one of the most important of social operations. . . . [N]ature, . . . has made this same ordure not only the cause of present disease when allowed to remain within the city, but the means of future health and sustenance when removed to the fields.” (160) そして、ロンドンの下水から出る 200 トンの廃棄物を 1 エーカーの緑地に（肥料として）用いると “seven crops, . . . have been produced in the year, each of them worth from 6l. to 7l.” (161) と計算していた。まさにロンドンの廃棄物を金に変える算段である。¹¹

都市と田舎の関係についてレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) は “a city eats what its country neighbours have grown.” (71) と端的に言い表しているが、チャドウィックらは、廃棄物を田舎に追いやり、肥料として使わせ、それをもとにして生産された農作物、酪農製品、食肉をロンドンの住人が食べるというサイクルを続けることを提案していた。トロイが行ったことはこのプロセスの篡奪である。チャドウィックらの提案は一見すると自然のサイクルに則った理想的な考えのようにみえるが、その実、田舎に都合の悪いものを押し付け、隠蔽しようとするプランでもある。一方、トロイの行為は疫病の温床と恐れられる場所で病気の羊を育て、それをロンドンに送り出し、金にする。都合の悪いものを押し付けられようとしていた田舎からの反撃とも解釈できる行動ではないだろうか。

トロイは都市の住人にとって脅威に見える沼地を、別の脅威を生み出す場所に変えようとしたのだ。しかも、沼地を馴化しようとした試みをあざ笑うかのように、water-meadows 化に失敗した結果残った水門を利用した。バスシバのような都会人の視点でもなく、オウクのように自然を作り変える者の視点でもなく、その両者をあざ笑いつつ、自身の利益を最大限にしようとする、そのような視点を沼地に向けていたのだ。

5. “out of place”であることの意義

このように考察すると、病気の源だと思われ、農村に有益なものに馴化されることもなく、“out of place”なもののような点において、沼地はトロイと似た性質を共有しているように見えてくる。

本稿の冒頭で湿地を “dirt” であると定義づけたギブレットの言葉を引用したが、その定義で言及されたダグラスは “There is no such thing as absolute dirt: it exists in the eye of the beholder.” (2) と述べている。バスシバやオウク（そして語り手）からは疫病の元凶と見なされる沼地は、一方で土地を肥沃にするものでもあり、ギブレットは “A stagnant swamp may sound horrible, but it can be a fully functioning native wetland with no actual or potential land

pathology” (ch. 15) と述べ、“stagnant swamp” の存在を擁護している。まさに “the beholder” の見方によって評価が異なるのだ。

そして “dirt” の定義が相対的であり得ることを指摘した上で、ダグラスは重要な問いとして “We must, therefore, ask how dirt, which is normally destructive, sometimes becomes creative.” (196) と投げかけ、自身で次のように応答している。 “[I]f all the weeds are removed, the soil is impoverished. Somehow the gardener must preserve fertility by returning what he has taken out.” (201-02) ダグラスが比喩を用いて述べている主張を、実社会や作品読解にそのまま当てはめることはできないが、不必要だと思われるものの重要性を指摘する声には耳を傾けても良いのではないか。すなわち、よどんでいる沼地であっても地球環境にとって必要であるように、トロイの存在も共同体に必要であった可能性を考察すべきではないか。確かにトロイの数々の行動は、共同体の倫理的に許容し難いものが多い。しかし、トロイらが排除された作品の結末が問題含みなのも事実である。¹² 共同体に不都合なものを排除することによって保たれる秩序の危うさが示唆されていると考えることはできないだろうか。

さらに付け加えると、断章となった未発表原稿そのものが “out of place” なもの——編者たちの言葉によれば “anomaly” (Morgan, “Appendix II” 402; Falck-Yi, “Appendix” 391)——である。結局、この章は最終原稿からは排除されてしまい、出版物には含まれなかった。その理由は定かではないが、ロンドンから都合の悪いものを隠蔽する行為がメタレベルでも反復されたと言える。すなわち、本作に理想化された農村を見出だすような都会の読者にとって都合の悪い行為——農村の住人が寄生虫にかかった羊をロンドンに出荷する行為——が隠蔽されたのである。この章がなぜ排除されたかをさらに考察することにより、作品読解がより深まる可能性は少なくないだろう。

本論考では “out of place” をキーワードとして、『はるか群衆を離れて』における沼地の表象並びに断章となった未発表原稿に着目し、“out of place” であるものに対するふるまいが、人物の共同体そして社会での位置づけを明ら

かにすることを示した。さらにはそれ自体が “out of place” である未発表原稿の読解を通して、作品世界をより立体的に理解できる可能性を指摘した。排他主義による社会の分断の危機が指摘される現在の状況下でハーディ作品を読む際に、共同体から排除されるものに対しての考察を行うことには一定の意義があるのではないだろうか。

註

1. 本作の “swamp” は「湿地」と訳されることもあるが、本稿では、付与されている嫌悪感を汲み取って「沼地」と訳した。
2. *Far from the Madding Crowd* からの引用は、原稿から 1901 年の Sixpenny Revision までを参照して “as far as possible to present what Hardy himself wrote” (Falck-Yi, “Note” xxxvii) としており、未発表の章 “The Sheep-Rot” の原稿を可能な限り再現している Oxford World’s Classics 版に依り、適宜 Penguin 版も参照した。日本語訳については、大阪教育図書版『トマス・ハーディ全集 4 はるか群衆を離れて』を参照しつつ、適宜拙訳を用いた。
3. “The Sheep-Rot” の章は Penguin 版では “draft-fragment” であると言及されている。“The Sheep-Rot” が省略箇所や削除箇所の多い未完成原稿であることを踏まえ、本稿では、適宜、“fragment” の訳語である「断章」という語を用いている。
4. バスシバがトロイの剣の舞を見せられた “the hollow amid the ferns” と第 44 章で描かれる沼地は同じ場所だと明記されているわけではないため、Anna West のように慎重な立場を採る者もいるが、ハーディ研究においては同じ場所だと考える論考が多い (Shires, Beegel 参照)。本論考においても、2 つの章で共通する描写が見られることやストーリー展開の整合性の観点から両者は同じ場所であると考え。
5. チャドウィックのレポートについての分析は Jackson の議論に負っている。(Jackson, ch.4)
6. ラスキンの抱いていた “purity” に関するイメージについての議論の一部は Schülting に負っている。ただし、Schülting はラスキンの議論を瘴気説とは結びつけていない (Schülting, Introduction)。
7. なぜこの章が最終稿に入れられなかったかは不明である。ローズマリー・モーガン (Rosemarie Morgan) は内容から推測して、Chapter 34 ～ 38 の一部として書かれたものではないかと述べており、削除された理由として「トロイをコントロールするのがしばしば困難になってきた」結果であ

ると推測し (Cancelled 8)、ドーセット博物館のスタッフであるリリアン・スウィンドール (Lilian Swindall) は「汚染された羊の詳細を出版することが“safe”ではなかったからではないか」と考えたようである (Morgan, “Appendix II” 412)。一方、ウェストは単に「執筆プランにおいて不必要になった」からだと考えている (West, ch.2)。

8. “The Sheep-Rot”の章については内容にまで踏み込んだ先行研究が少ないが、先駆的なものとしては Robert C. Schweik や Clarice Short の論文が挙げられる。

9. water-meadows は、川などからの水を引き入れることにより、牧草の生産性を高めた牧草地のことを指す。水門を作り、水の流れを計画的にコントロールする必要があった。詳細については West, ch.3 参照。

10. トリックスターについては山口、Hyde 参照。

11. メイヒューの指摘については、Schülting を参照したが、Schülting はメイヒューが具体的な計算をしていた点には注目していない (Schülting, ch.1)。

12. 特に結末の暗さに注目した論考としては Nemesvari、Regan 参照。

引用文献

Beegel, Susan. “Bathsheba’s Lovers: Male Sexuality in *Far from the Madding Crowd*.” *Modern Critical Views: Thomas Hardy*, edited by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1987, pp. 207-26.

Carpenter, Richard C. “The Mirror and the Sword: Imagery in *Far from the Madding Crowd*.” *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 18, no. 4, 1964, pp. 331-45.

Chadwick, Edwin. *Report to Her Majesty’s Principal Secretary of State for the Home Department from the Poor Law Commissioners, on an Inquiry into the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain; with Appendices. Presented to Both Houses of Parliament, by Command of Her Majesty, July, 1842*. W. Clowes and Sons, 1842. *Internet Archive*, <https://archive.org/details/b21365143/mode/2up>. Accessed 24 Feb. 2021.

Douglas, Mary. *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*. Routledge, 2002.

Falck-Yi, Suzanne B. “Appendix: Unpublished ‘Sheep-Rot Chapter.’” *Far from the Madding Crowd*, by Thomas Hardy, Oxford UP, 2002, pp. 390-98.

———. “Note on the Text.” *Far from the Madding Crowd*, by Thomas Hardy, Oxford UP, 2002, pp.

xxxi-xxxvii.

Farr, William. *Report on the Mortality of Cholera in England, 1848-49*. W. Clowes and Sons, 1852. *Internet Archive*, <https://archive.org/details/b24751297/mode/2up>. Accessed 8 March 2021.

Giblett, Rod. *Cities and Wetlands: The Return of the Repressed in Nature and Culture*. E-book ed., Bloomsbury, 2016.

Halliday, Stephen. *The Great Stink of London: Sir Joseph Bazalgette and the Cleansing of the Victorian Metropolis*. E-book ed., The History Press, 2013.

Hardy, Thomas. *Far from the Madding Crowd*. Oxford UP, 2002.

Hyde, Lewis. *Trickster Makes This World: How Disruptive Imagination Creates Culture*. E-book ed., Canongate, 2017.

Jackson, Lee. *Dirty Old London: The Victorian Fight Against Filth*. E-book ed., Yale UP, 2014.

Kreilkamp, Ivan. “Pitying the Sheep in *Far from the Madding Crowd*.” *Novel: A Forum on Fiction*, vol. 42, no. 3, 2009, pp. 474-81.

Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor: A Cyclopaedia of the Condition and Earnings of Those That Will Work, Those That Cannot Work, and Those That Will Not Work*. vol. 2, Frank Cass, 1967. 4 vols.

Morgan, Rosemarie. *Cancelled Words: Rediscovering Thomas Hardy*. Routledge, 2011.

———. *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy*. Routledge, 2008.

———, and Shannon Russell. “Appendix II: The Surviving Draft-Fragments of *Far From the Madding Crowd*.” *Far From the Madding Crowd*, by Thomas Hardy, Penguin, 2000. pp.xvii-xxxii.

Nemesvari, Richard. *Thomas Hardy, Sensationalism, and the Melodramatic Mode*. Palgrave Macmillan, 2011.

Page, Norman. *Thomas Hardy: The Novels*. Palgrave, 2001.

Regan, Stephen. “The Darkening Pastoral: *Under the Greenwood Tree* and *Far from the Madding Crowd*.” *A Companion to Thomas Hardy*, edited by Keith Wilson, Wiley-Blackwell, 2009, pp. 241-53.

Ruskin, John. *Modern Painters*. Edited by E. T. Cook and Alexander Wedderburn, *The Works of John Ruskin*, vol. 5, George Allen, 1903.

Schülting, Sabine. *Dirt in Victorian Literature and Culture: Writing Materiality*. E-book ed., Routledge, 2016.

Schweik, Robert C. “A First Draft Chapter of Hardy’s *Far from the Madding Crowd*.” *English Studies*, vol.

53, no. 4, 1972, pp. 344-49.

Shires, Linda M. Introduction. *Far from the Madding Crowd*, by Thomas Hardy, Oxford UP, 2002, pp. xi-xxx.

———. “Narrative, Gender, and Power in ‘Far from the Madding Crowd.’” *Novel: A Forum on Fiction*, vol. 24, no. 2, 1991, pp. 162-77.

Short, Clarice. “A Rejected Fragment of ‘Far from the Madding Crowd.’” *The Bulletin of the Rocky Mountain Modern Language Association*, vol. 25, no. 2, 1971, pp. 62-64. JSTOR, <https://www.jstor.org/stable/136629>. Accessed 27 Feb. 2021.

Squires, Michael. “*Far from the Madding Crowd* as Modified Pastoral.” *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 25, no. 3, 1970, pp. 299-326. JSTOR, <https://www.jstor.org/stable/2933436>. Accessed 5 Feb. 2021.

Staves, Shirley A. *The Decline of the Goddess: Nature, Culture, and Women in Thomas Hardy's Fiction*. Greenwood Press, 1995.

West, Anna. *Thomas Hardy and Animals*. E-book ed., Cambridge UP, 2017.

Williams, Raymond. *The Country and the City*. Vintage, 2016.

ハーディ、トマス『トマス・ハーディ全集4 はるか群衆をはなれて』清水伊津代、松井豊次、風間末起子訳、大阪教育図書、2020。

山口昌男『道化の民俗学』岩波書店、2017。

The Hand of Ethelberta における創作するヒロイン

長 田 舞

1 はじめに

1876年に出版された *The Hand of Ethelberta* もまた、その主人公エセルバータ・ペサウイン (Ethelberta Petherwin) に、その魅力の多くを負っている。トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の他の作品のヒロイン達と異なる点を Richard H. Taylor は「彼女はハーディのヒロイン達の中でもっとも世俗的で、毅然として野心的な (“She is the most worldly, ruthless and ambitious of Hardy’s heroines....”)] (Taylor 64) ヒロインと指摘している。さらに、Penny Boumelha はエセルバータの行動力について「非常にうまく物事を自分で対応する果敢なヒロイン (“a purposeful heroine who takes things quite successfully into her own hands.”)] (Boumelha 242) と指摘している。しかし、エセルバータのヒロインとしての最大の特徴は、そのキャラクターが明確に特定できないことにある。

確かに、ハーディの小説にはエセルバータのように様々な側面を持ったヒロインが登場する。例えば、*The Return of the Native* (1878) のユーステイシア・ヴァイ (Eustacia Vye) は異教的な目を持つ女性、魔女、ギリシャ女神のアルテミスなどに例えられている。一方、Margaret R. Higonnet は、テス・ダービフィールド (Tess Durbeyfield) の異種混交 (heterogeneity) について指摘している (Higonnet xxii)。しかし、Peter Widdowson は、エセルバータの「キャラクター」を論じる難しさについて、以下のように指摘している。

To discuss Ethelberta as ‘a character’ at all is difficult, and this problem itself is an important aspect of her significance: because she is so divided—as Ethelberta Chickerill, as Mrs Petherwin, as Professed Story-Teller, as the ‘beloved’ of four different men—and because the reader experiences her in all these roles, no one of which can be identified definitively as the ‘real’

Ethelberta, 'her character', if the term still means anything, must comprise all of these roles. (Widdowson 187)

あるいは Sarah Davies は、「本当の自己」と相手が抱く印象との差異について テスとエセルバータを比較して以下のように指摘している。「アレックとそしてエンジェルによって構築された‘理想の’女性と本当の自己との不一致によって破滅に追い込まれたテスとはちがい、エセルバータには‘本当の’自己もしくは明確な自己がないのである」(Unlike Tess, who is ultimately destroyed because of the discrepancy between her true self and the 'ideal' woman constructed by Alec and then Angel, Ethelberta has no 'real' or identifiable self) (Davies 126)。これはエセルバータのキャラクターが「役割」から成立しているとの Widdowson の指摘に通じる。

興味深い点は、エセルバータに関するこのような指摘が彼女の創作活動と深く関連しているという点である。¹ エセルバータは、唯一の作家・詩人であるヒロインとして、「世俗的で、毅然として野心的」なのであり、「非常にうまく物事を自分で対応し」、その役割を演じてゆく。テスがアレックとエンジェルが創り出した「役割」に翻弄されたのに対して、エセルバータは、自ら役割を創作し、与えられた役割を自覚的に演じる。読者が作品の主人公と作者を混同することによって創り出した作者に関する心象がいかなるものになるかに留意して、エセルバータは創作活動をおこなっている。この活動は、人々が彼女に対して抱く心象の形成に大きな影響を与える。そのため、エセルバータが持つ多面性とあいまって彼女の人物造形をさらに複雑でとらえがたいものになっているのである。

本稿はエセルバータがおこなう詩や物語などの創作活動が彼女の人物像の形成にどのように関係しているのかを分析し、人々が抱くエセルバータの心象と結婚の関係を明らかにする。さらに、人物像を形成していくうえで、社会的言説や作品で用いられている視覚化といった手法がどのように関連しているのか分析したい。

2 外見と印象

The Life and Work of Thomas Hardy のなかでハーディは物事の外見と外見が与える印象について以下のように述べている。

Nature is an arch-dissembler. A child is deceived completely: the older members of society more or less according to their penetration; though even they seldom get to realize that nothing is as it appears. (*Life* 182)

物事の外見とそれに対する印象は裏切るものであり、見た目通りのものはない。外見からうける印象と「実体」との差異についてのこのような考えはハーディの創作活動に影響を与えている。*The Hand of Ethelberta* においても人物と外見からうける心象との差異は重要な要素として機能している。*The Hand of Ethelberta* はエセルバータが散歩へ出かけることから始まる。

Young Mrs. Petherwin stepped from the door of an old though popular inn in a Wessex town to take a country walk. By her look and carriage she appeared to belong to that gentle order of society which has no worldly sorrow except when its jewellery gets stolen; but, as a fact not generally known, her claim to distinction was rather one of brains than of blood.¹ She was a respectable butler's daughter, and began life as a baby christened Ethelberta after an infant of title who does not come into the story at all, having merely furnished to Ethelberta's mother a means of occupying herself as head nurse.² (11 下線筆者)

エセルバータは容貌や身のこなしからすると上流階級に属しているように見えるが、彼女に具わっている上品な態度は、血統の良さよりも頭の良さからきているのである。つまり、その容貌や身のこなしから人々は上流階級に属しているのではないかという心象を抱くが、それは中流階級の出であるエセルバータからかけ離れており、人々がエセルバータの外見から抱く心象と執事の娘という「あまり知られていない事実」が乖離していることが分かる。

エセルバータが人々に与える印象と現実の彼女がかけ離れていることは、詩や物語を語るといふ彼女の創作活動にも密接に関係している。エセルバータは駆け落ちして結婚した夫にすぐに死なれ、夫の母親であるレディ・ペサウィン (Lady Petherwin) の庇護をうける。しかし、レディ・ペサウィンに内緒で亡き夫への不実を思わせるような詩集 “Metres by Me” をエセルバータは出版する。過去の出来事からインスピレーションをうけて詩集を書くことは、いわば過去の語り直しと解釈することができる。実際、ピコティ (Picotee) から詩集を受け取ったクリストファー・ジュリアン (Christopher Julian) は作者が不明にもかかわらず、その詩を読んで作者はエセルバータだと確信し、かつての二人の間におきた恋愛を思い出す。つまり、エセルバータの詩には読み手 (クリストファー) に過去の恋愛を想起させる力があるのである。

また、詩集という書かれたテキストに対する解釈はその作家のイメージ形成と関連している。エセルバータがおこなう詩作は過去を書き直す/語り直すだけでなく、その詩に対する世間の関心が作者の過去を書き直すことになる。なぜなら、「私的なものとしての女性は作家としての女性になり、作家としての女性は公の商品としての女性になる」 (woman as private commodity becomes woman as writer; woman as writer thus becomes woman as public commodity) (Fisher 78) という指摘にもあるように、その詩集 “Metres by Me” は世間の人々の間で評判になり、匿名で出版されたこともあり、その作者の性別、年齢、婚姻歴などについて様々な憶測が流れるからである。さらに、作者の性格についても人々は作品から次のように憶測する。

‘She is rather warm in her assumed character.’

‘That’s a sign of her actual coldness; she lets off her feeling in theoretic grooves, and there is sure to be none left for practical ones. Whatever seems to be the most prominent vice, or the most prominent virtue, in anybody’s writing is the one thing you are safest from in personal dealings with the writer.’

‘Oh, I don’t mean to call her warmth of feeling a vice or virtue exactly—’
(59)

作品を通して読者が作者に対して抱く心象は恣意的なものである。作者は温かい人柄だという意見もあれば、むしろそれは冷淡な証拠なのだと反対の意見をのべる者もいる。いずれにしろ、作品と作者の性格に関し口論する場面から、人々が作品に対してだけでなく作者に対しても興味を持ち、その人柄に対して様々な解釈/心象を持っていることが確認される。読者がおこなうさまざまな解釈が作家像を創り出しているのである。

“Wessex Reflector” (74) に掲載された記事も、詩集の作者に関する解釈と見なすことができる。

“‘The author of ‘Metres by Me’” Christopher began, “‘a book of which so much has been said and conjectured, and one, in fact, that has been the chief talk for several weeks past of the literary circles to which I belong, is a young lady who was a widow before she reached the age of eighteen, and is now not far beyond her fourth lustrum. I was additionally informed by a friend whom I met yesterday on his way to the House of Lords, that her name is Mrs. Petherwin—Christian name Ethelberta; and that she resides with her mother-in-law at their house in Connaught Crescent. She is, moreover, the daughter of the late Bishop of Silchester (if report may be believed), whose active benevolence, as your readers know, left his family in comparatively straitened circumstances at his death. The marriage was a secret one, and much against the wish of her husband’s friends, who are wealthy people on all sides. The death of the bridegroom two or three weeks after the wedding led to a reconciliation; and the young poetess was taken to the home which she still occupies, devoted to the composition of such brilliant effusions as those the world has lately been favoured with from her pen.’” (75)

記事には世間で色々と取沙汰され、推測されている “Metres by Me” の作者は 18 歳になる前に未亡人となった若い婦人で、現在 20 歳をこえたペサウィン夫人であり、洗礼名はエセルバータであると書かれている。さらに、記事によるとエセルバータは執事の娘ではなく、故シルチェスター主教の娘であり、周囲に反対された秘密の結婚の後、程なく夫が亡くなったため、姑と和解するに至ったとの物語が詩作への経緯として付加されている。このように、エ

セルバータは詩集を出版することにより、若くして未亡人となった聖職者の娘という新しい心象を手に入れる。それにより、既存の人物像に新しい彼女に関する情報が上書きされていくのである。

3 創作と商品化

エセルバータの人物像を創るのは彼女の詩集だけではない。

‘Yes; and it is through her being of that curious undefined character which interprets itself to each admirer as whatever he would like to have it. Old men like her because she is so girlish; youths because she is womanly; wicked men because she is good in their eyes; good men because she is wicked in theirs.’

‘She must be a very anomalous sort of woman, at that rare.’

‘Yes. Like the British Constitution, she owes her success in practice to her inconsistencies in principle.’

‘These poems must have set her up. She appears to be quite the correct spectacle. Happy Mrs. Petherwin!’ (79-80)

エセルバータが「不思議なはっきりしない性格」(curious undefined character) (79) のため、彼女の称賛者はそれぞれの好みに合わせて彼女のことをどのようにでも解釈することができる。³ そして、そのような「彼女の首尾一貫性のなさ」(her inconsistencies) (80) が、エセルバータに成功をもたらしたのである。エセルバータは詩集の創作を通して彼女自身の印象操作をおこなったが、“spectacle”という言葉が用いられていることから、視覚的なイメージとして自身を記号化し、人々の願望に応じて様々な心象を人々に与えていることがわかる。つまり、人々がエセルバータに対して異なる印象を創りあげるため、彼女の実体は明確にならないのである。多面的な自己を持っているため、エセルバータは「本当の自分」というものにとらえることが難しいのだが、彼女がおこなう自己の人物像の創造がさらにエセルバータの実像をつかみ取ることを困難にしているのである。

エセルバータの印象の構築に関わるのは詩集の出版だけではない。作者本人による物語の語りも印象の形成と操作に大きな影響を与えることになる。エセルバータの物語の朗読会は成功し、彼女は新たな話題の主としてみられ、「新聞の朝刊で批評され、また幾つかの週刊批評紙で注目を集め」(she was duly criticized in the morning papers, and even obtained a notice in some of the weekly reviews) (122) たのである。

‘Mrs. Petherwin’s personal appearance is decidedly in her favour,’ said another [weekly review]. ‘She affects no unconsciousness of the fact that form and feature are no mean vehicles of persuasion, and she uses the powers of each to the utmost. There spreads upon her face when in repose an air of innocence which is charmingly belied by the subtlety we discover beneath it when she begins her tale; and this amusing discrepancy between her physical presentment and the inner woman is further illustrated by the misgiving, which seizes us on her entrance, that so impressionable a lady will never bear up in the face of so trying an audience.... The combinations of incident which Mrs. Petherwin persuades her hearers that she has passed through are not a little marvellous; and if what is rumoured be true, that the tales are to a great extent based upon her own experiences, she has proved herself to be no less daring in adventure than facile in her power of describing it. (123 下線筆者)

エセルバータの容貌は物語を語るうえで利点となっており、彼女は自分の容姿が説得手段になることを十分に意識しながら物語を語っている。詩集では自らの過去の経験を通して詩作をおこなっていたが、朗読会で語る内容は全くのフィクションであり、エセルバータの人生における経験とは無関係だった。しかし、エセルバータの外見が語りに巧妙に作用し、物語は彼女の経験そのものだと思わせるようになる。その結果、彼女が創造した物語は彼女の人生として聴衆に認知され、彼女の新しい側面として既存の人物像に加わるのである。

ジェニファー・A・ウィキーは『広告する小説』においてヴィクトリア朝の「広告」における創作とメディアの関係を論じており、広告と文学作品の

類似性について指摘している。⁴ 自作の物語の朗読会の前にエセルバータはクリストファーに朗読会の広告の下書きを見せる。

She drew from her pocket a folded paper, shook it abroad, and disclosed a rough draft of an announcement to the effect that Mrs. Petherwin, Professed Storyteller, would devote an evening to that ancient form of the romancer's art, at a well-known fashionable hall in London. (106)

エセルバータは朗読会へ聴衆を集めるために自ら広告を作成し、自分のことを「物語の語りの専門家」(Professed Storyteller) (106) と形容している。このことはエセルバータが人々の関心を集めるために広告を使用する効果を知っていることを示している。広告だけでなく、物語の講演に関する新聞記事が掲載されたことによって、エセルバータは新聞（メディア）を利用して自己の人物像を創り出し世間に広め、自己を商品化しているのである。⁵

興味深いのは、聴衆を前に自ら物語するという行為を演じることによって、彼女が自身を作品として提示していることだ。つまり、エセルバータは自らを視覚的なイメージとして記号化することにより、自らのイメージを宣伝広告の対象として流通する商品としているのである。ユースタンス・レディウェル (Eustance Ladywell) が描いたエセルバータがモデルとなった画絵はその例であり、アルフレッド・ネイ (Alfred Neigh) が持っていたエセルバータの写真のように、記号/商品として流通するエセルバータを視覚化したものにほかならない。彼の描いた絵は、さながら新聞に掲載された宣伝広告のように、エセルバータのイメージを世の人々に示すことになるのである。

手練手管を尽くして世の中を渡ってきたエセルバータであるが、彼女の戦略は滞りだす。物語の語りを始めた頃はエセルバータの語りは人々の注目を集めたが、徐々に注目をひかなくなるのである。エセルバータとピコティはどのように生計を立てていくか解決策を模索する。

‘You might travel about to country towns and tell your story splendidly.’

‘A man in my position might perhaps do it with impunity; but I could not

without losing ground in other domains. A woman may drive to Mayfair from her house in Connaught Crescent, and speak from a platform there, and be supposed to do it as an original way of amusing herself; but when it comes to starrng in the provinces she established herself as a woman of a different breed and habit. I wish I were a man! I would give up this house, advertise it to be let furnished, and sally forth with confidence. But I am driven to think of other ways to manage than that.’

Picottee fell into a conjectural look, but could not guess.

‘The way of marriage,’ said Ethelberta. (170-71 下線筆者)

作家として創作活動しながら生計を立てることは、自立した女性像を抱かせる。しかし、“Metres by Me”は「アナクレオン風」(Anacreontic) (57) の作風であり、物語の語りは Daniel Defoe の形式を基に作られている。エセルバータは男性によってつくられた既存の枠組みを利用して創作している。しかも、エセルバータが創作活動をおこなっている目的は、人々に「女性はコンノート・クレッシェントの自宅からメイフェアまで馬車で出かけ、その舞台で語り、自ら楽しむための独創的なやり方としてそれをやっていると思われることが必要」(A woman may drive to Mayfair from her house in Connaught Crescent, and speak from a platform there, and be supposed to do it as an original way of amusing herself) (170) というのだ。大衆に抱いてもらいたいこのような人物像のためには、地方を回りながら物語を語ることはできない。「わたしが男だったらいいのに！」(I wish I were a man!) (170-71) という言葉は、エセルバータが作家として生きていくうえで限界に直面していることを示している。エセルバータが書いているものは彼女の書きたいものではなく、生きていくために書かなければならないものなのである。大衆に好まれる人物像を作っていくために、男性によって作られた既存の枠組みの外に出ることはできない。エセルバータは男性が作った既存の枠組みの中で生きていくため、結婚という選択肢を選ぶのである。

エセルバータがおこなってきたさまざまな創作活動は、結婚市場における自己の商品化と広告戦略に効果的に作用する。そのため彼女が創り出したそ

それぞれのイメージに魅せられた身分も年齢も異なる求婚者達——クリストファー、ネイ、レディウエル、そして、マウントクレア卿 (Lord Mountclere)——が彼女のもとに集まってくることになるのである。

4 むすび——創作と結婚

結婚に関するエセルバータとマウントクレア卿との駆け引きは、最終的には屋敷からの脱出計画を巡って展開されることになるが、エセルバータの創作との関係から考えると、それに先立つ屋敷でのエセルバータの物語の朗読の場面に見ることができる。

エセルバータは満足のいく物語を創作することができなくなっただけでなく、自ら創り出した自身の偶像が実体からかけ離れていることが暴露されるのを恐れながら暮らすのに疲れたため、求婚者の1人であるマウントクレア卿との結婚を決意する。そして、マウントクレア卿の館に招待されたエセルバータは自責の念から自らの本当の人生についての物語を語りだすのである。しかし、フィクションの物語を語るこれまでの物語り方と全く異なる語り方であったために、人々は当惑するのだった。

The guests began to look perplexed, and one or two exchanged whispers. This was not at all the kind of story that they had expected; it was quite different from her usual utterances, the nature of which they knew by report. Ethelberta kept her eye upon Lord Mountclere. Soon, to her amazement, there was that in his face which told her that he knew the story and its heroine quite well. When she delivered the sentence ending with the professedly fictitious words: 'I thus was reduced to great distress, and vainly cast about me for directions what to do,' Lord Mountclere's manner became so excited and anxious that it acted reciprocally upon Ethelberta; her voice trembled, she moved her lips but uttered nothing. To bring the story up to the date of that very evening had been her intent, but it was beyond her power. The spell was broken; she blushed with distress and turned away, for the folly of a disclosure here was but too apparent. (299-300 下線筆者)

エセルバータは、創作活動とそれに対するメディアの評価、さらには自身をも記号化し商品として宣伝流通させることで自己の人物像を創りだしてきた。しかし、マウントクレア卿の顔には、エセルバータが語ろうとしている現実の物語などすでにお見通しであるとの表情が浮かんでおり、そのことがエセルバータの語りを動揺させる。情報量において有利に立たれた上に、エセルバータがおこなおうとしていた自ら創った自分の偶像の解体と再創造、つまり、偶像を実像へと転換する作業は、マウントクレア卿によって「わたしの聞いたその話が全く創作だとは殆ど信じられないほどでしたよ」(I could scarcely believe that the story I was listening to was utterly an invention) (300)と、それまでのフィクションのひとつにされ、阻止されてしまうのである。これによって、エセルバータがおこなってきた一連の自己の人物像の創造は終わることになる。マウントクレア卿はエセルバータの正体を知ったうえで求婚していたため、彼女が創りあげた虚構の世界が破綻をきたすことなく、二人の結婚は執り行われるのである。

エセルバータは詩や物語を創作することを通して、人々が彼女に対して抱く心象をも創造した。そして、彼女は自ら創り出した彼女自身の人物像によって彼女自身を結婚市場における魅力的な商品として表象することに成功した。しかし、エセルバータの作品の創作と自己のイメージの創造はマウントクレア卿との結婚の後、変化していくのである。よく知られているように、19世紀の女性にとって、社会的に階級を上昇していくためには結婚しか手段がなかった。4人の求婚者の中から、身分の一番高いマウントクレア卿を選ぶことは結婚と女性のアイデンティティの関係から考えれば、階級を上げる当然の手段である。しかし、結婚によって、女性は新たなアイデンティティを手に入れると同時に男性社会へと改めて組み込まれていく。結婚以前のエセルバータの言動は男性達が求める理想の女性像を創り出していたが、結婚後、最終章において、エセルバータが虚構であれ、真実であれ、自らに対する心象を創るために創作する機会はなくなる。なぜならば、エセルバータは結婚したことによって人々が望むような自己の人物像を創る必要がなくなっ

たからである。

結婚により、エセルバータは家族を養うために創作する必要がなくなる。ピコティによるとエセルバータは書斎で叙事詩を書いており、エミリーン(Emmeline)をその読み手として雇っている。その創作活動は大衆にむけたものではなく、個人的な行為となり、屋敷内に封印される。創作に専念できる相手との結婚はエセルバータの理想であったから、マウントクレア卿との結婚は理想に近かったはずだ。しかし、エセルバータが自らの公的な人物像を創り出していく機会は少なくなり、エセルバータの物語は、御者の噂話や家族が彼女に抱いた心象として語られるにとどまる。他者の印象や心象がレディ・マウントクレア(Lady Mountclere)という人物像を創り出しているため、エセルバータの実像は形骸化し、レディ・マウントクレアという名前がラベル付けされただけの「エセルバータの物語」が村人や家族の語りによって上書きされていくのである。

注

*本稿は、日本ハーディ協会第 63 回大会（2020 年 10 月 31 日 Zoom によるオンライン開催）における口頭発表に加筆・修正したものである。

1 そのため、作家としてのハーディとの共通点を指摘する批評だけでなく、二人の作品や家族関係の共通点を指摘する批評もある（Fisher 80; Roberts 88; Widdowson 159; Millgate 287）。

2 *The Hand of Ethelberta* からの引用はすべて Penguin 版を用い括弧内にページ番号を記す。

3 本稿での作品の日本語訳は、大槻茂行訳『トマス・ハーディ全集 5 エセルバータの手』（大阪教育図書 2009）を使用するが、翻訳は Macmillan の New Wessex 版を用いており、Penguin 版と異なる箇所がある。そのため、翻訳を参考にしたが版の違いにより異なる訳となった場合がある。

4 19 世紀前半においては、「新聞記者と、広告書きと、野心的な「作^{ライター}家」とをはっきりと区別する境界線が厳密なものではなかった」（ウィキ 48）と広告と文学作品の境目が曖昧だったことが指摘されている。また、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)は自分の作品の講演（朗読）会をおこなう際、自ら広告を作っていた（ウィキ 40）。さらに、オスカー・ワイルド(Oscar Wilde)を使った広告を例にあげ、文学と広告の類似性を指摘している（ウィキ 142）。

5 エセルバータは結婚市場における商品として例えられている。“her kindred had worked and continued to work with their hands for bread, might lead such an one to consider that the novelty was dearly purchased by a mover in circles from which the greatest ostraciser of all is servitude.” (210) また、ジョウイ(Joey)は当時の結婚市場における男女比について以下のように述べている。“Husbands is rare; and a promising courter who means business will fetch his price in these times, big or small, I assure ye.”(212)

引用文献

Boumelha, Penny. “‘A Complicated Position for a Woman’: *The Hand of Ethelberta*.” *The Sense of Sex: Feminist Perspective on Hardy*, edited by Margaret R. Higonnet, U of Illinois P, 1993, pp.242-59.

Davies, Sarah. “*The Hand of Ethelberta*: De-Mythologising ‘Woman’.” *Critical Survey*, vol. 5, 1993, pp.123-30.

Fisher, Joe. *The Hidden Hardy*. Macmillan, 1992.

Hardy, Thomas. *The Hand of Ethelberta*. Edited by Tim Dolin, Penguin, 1997.

———. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Edited by Michal Millgate, Macmillan, 1989.

Higonnet, Margaret R. Introduction. *Tess of the D’Urbervilles*, by Thomas Hardy, edited by Tim Dolin, Penguin, 1998, pp. xix-xli.

Millgate, Michael. *Thomas Hardy a Biography Revisited*. Oxford UP, 2006.

Roberts, Patrick. “*Ethelberta: Portrait of the Artist as a Young Woman: Love and Ambition*.” *The Thomas Hardy Journal*, vol. 10, no.1, 1994, pp.87-99.

Taylor, Richard H. *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels*. Macmillan, 1982.

Widdowson, Peter. *Hardy in History: A Study in Literary Sociology*. Routledge, 1989.

ハーディ、トマス 大槻茂行訳 『トマス・ハーディ全集 5 エセルバータの手』大阪教育図書 2009

ウィキ、ジェニファー・A 富島美子訳 『広告する小説』国書刊行会 1996

SYNOPSIS OF THE ARTICLES

WRITTEN IN JAPANESE

Place “Out of Place”:

The Swamp and the Fragment in *Far from the Madding Crowd*

YUKI TSUCHIYA

Most of Thomas Hardy’s novels encapsulate, as Norman Page observes, “a strong sense of community,” and their characters are typically divided into “insiders” and “outsiders.” Among these novels is *Far from the Madding Crowd*, where the story is triggered by outsiders moving into a closely knit community of Weatherbury.

Focusing on a swamp as a key site “out of place” of the community, with three characters (i.e. Bathsheba, Oak, and Troy) as central actors surrounding this site, this paper argues that the swamp not only symbolizes the characters’ sexual desire, but also problematizes the characters’ position in the community.

The paper first discusses Bathsheba’s view of the swamp. It is first described in Chapter 44, where Bathsheba, without knowing it, spends a night next to the swamp after the revelation of Troy’s betrayal. Through a critical reading of the descriptions of the swamp, taking into account a pathological discourse of the 19th century Britain concerning the cause of contagious diseases (esp. “miasma theory”), this paper suggests that her view—and probably the narrator’s view as well—on the swamp reflects that of “townsfolk” (outsiders), not of country people.

The paper further examines the unpublished chapter, casually entitled “The

Sheep-Rot,” where the other two male characters interact vehemently over sheep’s disease. Oak finds out Troy’s plan to intentionally make sheep diseased by letting them feed on the swamp after it is artificially flooded and then drained; as the disease temporarily fattens the sheep, Troy plans to sell them at a high price. A possible reading is that while Oak’s plan to drain the swamp, to some extent, reflects the view of “townsfolk” (outsiders) as Bathsheba, Troy’s attitude can be regarded as an insider’s counterattack on Londoners’ exploitation of the country.

This paper suggests that both the swamp and the unpublished chapter, which can be labelled as something “out of place” or “anomaly,” may share an ironical feature with Troy, who sheds all the more light on the inside reality of the community because he is out of place and anomalous.

The Creative Heroine in *The Hand of Ethelberta*

MAI OSADA

It has been argued that Ethelberta Petherwin, the heroine of *The Hand of Ethelberta*, has such varied identities that the other characters and even readers often find it difficult to grasp the ‘real’ Ethelberta. This essay examines Ethelberta’s poems and romances, weekly reviews, newspaper articles, an advertisement concerning Ethelberta, and her portrait painted by Eustance Ladywell, and reveal how Ethelberta creates her own public image and at the same time, her image is constructed through social discourses and visualisation of her.

First, this essay investigates Ethelberta’s collection of poems, “Metres by Me.” Her poems are based on merely a part of her past experiences. Her efforts to compose poems, therefore, are a means to rewrite/recreate her own past. In “the Wessex Reflector,” she is reported to be the daughter of the late Bishop of

Silchester, even though she is actually the daughter of a butler. Through the poems, she is successful in creating her new public image that people want.

Second, this essay studies how her story-telling influences her public image. Stories she tells in front of an audience are sheer fiction, unlike her poems. However, her masterly storytelling makes audiences believe that her stories must be her real experiences. Moreover, newspaper articles regarding her storytelling create and spread her new public image. The newspaper articles, the advertisement, her portrait, as well as her photograph are described as equipment to disseminate her image among the general public.

After her marriage with Lord Mountclere, Ethelberta does not need to create a public image for her living and marriage. While she devotes herself to writing an epic poem in her manor house and fails to demonstrate her creative power to create her image, the villagers' account of their lady constructs her social image as Lady Mountclere at the end of the novel.

[書評]

Alan Manford, ed., *The Woodlanders*
(Cambridge: Cambridge UP, 2019)
lxxxiv + 673 pp. ISBN: 9781107046504

上原 早苗
Sanae UEHARA

2019 年 9 月にケンブリッジ大学出版局からハーディ小説の校訂版第一弾が刊行され、2021 年 3 月には第二弾が出版された。監修者は、現在カナダのウィルフリッド・ローリエ大学で教鞭を執るリチャード・ニームスヴァーリ。彼は、オックスフォード・ワールド・クラシックス・シリーズの *The Trumpet-Major* の編纂者でもある。ニームスヴァーリによると、今後はハーディの小説だけではなく短編集の校訂版も刊行し、*The Cambridge Edition of the Novels and Stories of Thomas Hardy* 全 18 巻（小説 14 巻、短編集 4 巻）の完結を目指すという。現段階で刊行されている作品は以下のとおりである。

Richard Nemesvari, ed., *Desperate Remedies*, August 2019, ISBN: 9781107036925
Simon Gatrell, ed., *Under the Greenwood Tree*, August 2019, ISBN: 9781107089020
Alan Manford, ed., *The Woodlanders*, August 2019, ISBN: 9781107046504
Tim Dolin, ed., *The Return of the Native*, March 2021, ISBN: 9781139794978

ハーディのテキストはこれまでもマクミラン社、オックスフォード大学出版局、ペンギン社など様々な出版社から刊行されており、いずれのエディションを使ってハーディの作品を研究すべきかが議論されてきた。この度のケンブリッジ大学出版局の校訂版刊行により、研究者にとってさらに選択肢が増えたことになる。本書評で取り上げるのはアラン・マンフォード編纂の

The Woodlanders だが、このテキストは独立した小説であると同時に全集の一巻でもある。したがって、この書評の目的はケンブリッジ版全集刊行の意味・意義に言及しつつ、アラン・マンフォード編纂のテキストの特色を明確にするところにある。まずは前者の意味・意義を明らかにするため、いささか迂回することになるが、テキスト編纂法の変遷史を概観しておきたい。

20 世紀の英米の書誌学は作家中心主義から読者中心主義へと大きくパラダイム転換し、ハーディのテキスト編纂法もこのパラダイム転換により激変する。前者の作家中心主義の編纂法を久しく牽引してきたのは、サー・ウォルター・グレッグとその信奉者フレッドソン・パワーズおよび G・トマス・タンセルである。所謂「グレッグーパワーズータンセル理論」を貫くのは、底本を厳密に選定することにより、作家以外の第三者による介入を徹底して排除しようとする姿勢であり、作家の最終的な意図を可能な限り実現しようとする姿勢である。「グレッグーパワーズータンセル理論」に基づいて編纂されたハーディのエディションとしては、クラレンドン版およびその後継のオックスフォード・ワールド・クラシックス・シリーズが挙げられる。これらのエディションでは、アクシデンタルに関しては（ハーディの原稿が現存する場合は）原稿が底本とされ、植字工の介入と同一視されるハウス・パンクチュエーションが排されてハーディ本来のライト・パンクチュエーションが復元された。サブスタンティヴについては基本的に最終稿のウェセックス版が選定され、その本文が原稿に落とし込まれているが、なかには雑誌編集者により削除された挿話が初めて活字化された *Far from the Madding Crowd* のような特筆すべきテキストもある。校訂版刊行以前のハーディ研究では、ニュー・ウェセックス版——改変主体の不明な修正（改竄）が組み込まれたライブラリ版やグリーンウッド版を底本とする、出自のいかがわしい流布本——が広く使われており、校訂版刊行はハーディのテキスト編纂史に一つのメルクマールを刻んだ事件であった。しかし、クラレンドン版やオックスフォード版の編纂法に問題が全くなかったというわけではない。なぜなら、

この編纂法は他者の介入をこれまた編纂者という他者の介入によって排しようとする同語反復的構造を有するからである。編纂者という他者はどこまで作者の意図に迫りうるのか、編纂者の判断は時として恣意的なものにならざるをえないのではないか、という問いが本文校訂には常に影のように随伴するのである。また、「グレッグーパワーズータンセル理論」によって編纂されたハーディのテキストは若干の例外があるものの基本的にアクシデンタルを原稿に基づき、サブスタンティヴは最終稿のウェセックス版に拠るため、当然のことながら、誕生するテキストは折衷版となる。言い換えれば、ハーディが生前目にしたことのない合成的なエディションが編纂され、この人工的な折衷版に対するアレルギー反応がアカデミアの世界で惹起されることになる。

この作家（・編集者）中心主義の折衷版を斥けるべく刊行されたのがペンギン版である。ペンギン版では読者の存在に光を当て、「ハーディの読者が出逢った最初のテキストのかたち」を復元しようとする。明らかな誤植を除けば編纂者は小説本文に介入しない姿勢がとられるが、それは、たとえ植字工や編集者による介入・改竄が作品に認められるようとも、一旦読者と遭遇した作品は作者の手を離れて社会的に自律した存在になると考えられるからであろう。また、ヴィクトリア朝の書評家が通常初版を読んで書評を草し、ハーディもまた書評に敏感に反応して作品に修正を施したことを踏まえると、初版を底本とするテキストの刊行意義は極めて大きいと言える。しかし、軽量化が最優先されるペーパーバックの常として、ペンギン版には異同の多くが記載されず捨象されるという難があった。その難を克服するべく、着手されたのがニームスヴァリを監修者に迎えたケンブリッジ版だ、というふうに捉えると、テキスト編纂史におけるケンブリッジ版の位置付けが明確になるだろう。

ケンブリッジ版はペンギン版と同じく初版を底本とするが、小説の生成過程に関わる注釈は、ペンギン版とは比較にならぬほど充実している。冒頭には各ヴァリエーションの詳細な説明が付され、サブスタンティヴの異同はすべて

脚注に、アクシデンタルは巻末のヴァリアント・リストにそれぞれ記載されている。膨大な量の加筆削除を正確に転写するのは神経のすり減るような作業だったに違いない。快挙という言葉が相応しい出版事業だ。このエディションの難を敢えて挙げるなら、ケンブリッジ版は膨大な情報が良質の紙に印刷されているため、とにかく一冊が驚くほど分厚く重い。いずれの巻も 1 kg を超えるのではなかろうか。持ち運びには不向きなエディションだ。印刷コスト削減や収蔵場所の縮小、さらには「いつでもどこでも」をモットーに書籍の電子化が推進されるなか、ケンブリッジ版編纂事業は時代の流れに逆行するようなエディション作りだと言えないこともない。もっとも、現代の読者ならば、ケンブリッジ版を「自炊」して「いつでもどこでも」膨大な情報をたやすく手に入れるのだろうか。

テキスト編纂の史的展開を踏まえつつ、ケンブリッジ版刊行の意味・意義を纏めれば以上のようになるが、それでは、マンフォード編纂 *The Woodlanders* に固有の特色はどのような点にあるのだろうか。最も際立った特色の一つ挙げるなら、それは、原稿内部の改変の詳細な提示にあると言える。ここで、デイル・クラマー編纂のクラレンドン版 *The Woodlanders* とマンフォード編纂のテキストを比較してみよう。以下は、嵐の晩にグレイス・メルベリーがジャイルズに向かって “Come to me!” と叫ぶ、あの有名な場面の直前の一節である。

クラレンドン版

本文（原稿とウェセックス版の折衷版）

“Yes, Gracie,³² yes. I do not at all mean that the question between us has not been settled by your³³ marriage turning out hopelessly unalterable. I merely meant—well, a feeling—no more.” 15

“In a week, at the outside, I should be discovered if I stayed here; and I think that by law he could compel me to return to him.”

“Yes. Perhaps you are right. Go when you wish, dear Grace.” 20

His last words that evening were a hopeful remark that all might be well

with her yet; that Mr. Fitzpiers would not intrude upon her life, if he found that his presence cost her so much pain. Then the window was closed, the shutters folded, and the rustle of his footsteps die away.

No sooner had she retired to rest that night than the wind began to rise, and after a few prefatory blasts to be accompanied by rain. The wind grew more violent, and as the storm went on it was difficult to believe that no opaque body, but only an invisible colourless thing was trampling and climbing over the roof, making branches creak, springing out of the trees upon the chimney, popping its head into the flue; and shrieking and blaspheming at every corner of the walls. As in the grisly³⁴ story, the assailant was a spectre which could be felt but not seen. She had never before been so struck with the devilry of a gusty night in a wood, because she had never been so entirely alone in spirit as she was now. She seemed almost to be apart from herself—a vacuous duplicate only. The recent self of physical animation and clear intentions was not there. (p. 285) 25 30 35

脚注

32 Gracie] Grace MS-MM

33 your] the fact of your MS-MM

34 grisly] old MS-MM

ケンブリッジ版

本文（初版）

“Yes, Gracie, yes. I do not at all mean that the question between us has not been settled by your marriage turning out hopelessly unalterable. I merely meant—well, a feeling—no more.”

“In a week, at the outside, I should be discovered if I stayed here; and I think that by law he could compel me to return to him.” 5

“Yes; perhaps you are right. Go when you wish, dear Grace.”

His last words that evening were a hopeful remark that all might be well with her yet; that Mr. Fitzpiers would not intrude upon her life, if he found that his presence cost her so much pain. Then the window was closed, the shutters folded, and the rustle of his footsteps die away. 10

No sooner had she retired to rest that night than the wind began to rise, and after a few prefatory blasts to be accompanied by rain. The wind grew more violent, and as the storm went on it was difficult to believe that no opaque body, but only an invisible colourless thing, was trampling and climbing over the roof, making branches creak, springing out of the trees upon the chimney, popping its head into the flue, and shrieking and blaspheming at every corner of the walls. As in the grisly story, the assailant was a spectre which could be felt but not seen. She had never before been so struck with the devilry of a gusty night in a wood, because she had never been so entirely alone in spirit as she was now. She seemed almost to be apart from herself—a vacuous duplicate only. The recent self of physical animation and clear intentions was not there. (p. 449)

脚注

- 1 Gracie] Grace MS-MM
 2 your] the fact of your MS-MM
 2 turning out hopelessly unalterable. MS2] holding good after all MS1
 6 MS Perhaps <so.> You
 12-13 The wind grew . . . and as MS2] As MS1
 13-14 that no opaque . . . an invisible MS3] the gale an invisible, MS1] that only an invisible, MS2
 15 roof, making branches creak, MS2] roof, MS1
 16-17 into the flue . . . walls. As MS2] in and out again; that it was as MS1
 17 grisly story] story MS1] old story MS2-MM
 17-18 the assailant was a MS2] a MS1
 18-19 before been so . . . the devilry MS2] observed the features MS1
 20-22 entirely alone in . . . not there. MS3] much alone. MS1] entirely alone in spirit as she was now. [*inserted from fo. 412^v:*] She seemed almost to be apart from herself—a vacuous duplicate only. The old self of physical animation and clear intentions was not there. [*She . . . be pu*] MS2

クラレンドン版の *The Woodlanders* では、原稿内部の執筆段階の確定が断念され、原稿の最終形のみが提示されている。通常、執筆段階の確定にはイン

クの色や筆記具、ペン先の違いなどの識別が肝要とされるが、*The Woodlanders* の原稿執筆に使用されたインクは経年変化による褪色が進んで識別困難な箇所が決して少なくない。また、黴の発生による原稿の変色が至るところに認められ、インクの色や文字そのものの判読が困難な箇所さえあるのだ。クラマーが執筆段階の確定を断念したのも無理はない。マンフォードはしかし、クラマーが断念した困難な作業に果敢に挑戦し、数カ所を除いて改変の層を腑分けした。引用箇所の脚注に限定しても、MS1、MS2、MS3 という記号により3層の改変を提示している。さらにマンフォードは、“*inserted from fo. 412^v*” という注釈を付すことで、右頁 (recto) の修正と左頁 (verso) のそれとを区別し、読者が執筆過程をより十全に視覚化できるよう、配慮している。ケンブリッジ版刊行により、*The Woodlanders* の原稿の生成過程が初めて活字化されたのは特筆に値するだろう。

また、ケンブリッジ版には検閲の痕跡への言及があることにも注目したい。例えば、フィッツピアーズとシュークの不倫が示唆される箇所は、掲載誌『マクミラン・マガジン』では編集者の意向を受けて削除されることになり、原稿にはハーディの手により印刷所への削除指示 “omit for mag.” が記されている。当該指示に対応する部分をマンフォードのテキストで確認すると、以下のように読まれる。

本文

It was daybreak before Fitzpiers and Suke Damson re-entered Little Hintock.

脚注

7-8 It was daybreak . . . Little Hintock.] [*marked in MS: “omit for mag.” And omitted A1-MM*]

印刷所への指示書きは本文異同ではないため、脚注に “*marked in MS: ‘omit for mag.’*” を入れる必要はないのだが、マンフォードはわざわざこの指示書き

を斜体字で活字化している。ハーディと出版者との葛藤という歴史性もマンフォードは鮮明に視覚化しようとするのだ。また、“*And omitted A1-MM*”とあることから、当該箇所はイギリスでは雑誌版のみが削除の対象となったのに対して、アメリカでは雑誌だけでなく、A1（アメリカの初版）においても削除されたことがわかる。ヘンリー・ハーバーは、アメリカにおいてグランディズムはより強力に作動していると嘆いたが、それを窺わせるようなケースである。上記の脚注は一例にすぎないが、マンフォードの注釈は実に充実しており、当時の出版・検閲制度に関する情報の宝庫となっている。これを研究に活用しない手はないだろう。

ここでハーディ研究において久しく議論されてきた問い、「いずれのエディションを使って研究すべきか」に立ち返れば、折衷版が拒けられた現在、二つのエディションが有力候補として挙げられよう。一つは、最終稿のウェセックス版である（注：ニュー・ウェセックス版ではない）。ウェセックス版は流布本とはいえ、生物学的死を迎えたハーディの「最終」到達点に位置するテキストであり、その「最終的」な創造のかたちを触知したいと思う読者にとっては依然として価値あるテキストだろう。特に *Tess of the d'Urbervilles* のように、初版刊行以降もハーディの創造力が衰えずに決定的な手入りが第5版以降の本文に施されている場合、初版を分析テキストとする意味は限定的なものに留まるだろう。もう一つの候補は、現在刊行中のケンブリッジ版である。人文系教育組織が冬の時代を迎え、現在英語圏の大学でも文学・書誌学の後継者養成は困難を極めている。この度のケンブリッジ版編纂事業は、アラン・マンフォードやサイモン・ギャトレルなどの第一級の書誌学者が存命中に実現させたいとの、出版社とアカデミア双方の切実な思いから生まれた企画であろう。現段階では4巻しか刊行されていないが、編纂者の布陣や編纂方針、これまでのエンドプロダクトの水準の高さを見ても、このエディションを超える校訂版は今後刊行されることはまずないと思われる。ケンブリッジ版が多くの大学図書館・研究室で購入されることを心から願う。

Juliette Berning Schaefer and Siobhan Craft Brownson, eds.,
Thomas Hardy's Short Stories: New Perspectives
(London and New York: Routledge, 2017)
xii + 200 pp. ISBN: 978-1-4724-8003-3.

永松 京子

Kyoko NAGAMATSU

Thomas Hardy の短編小説の研究が長編小説に比べて少ないことは間違いな
いであろう。代表的な研究書と言えば、Kristin Brady の *The Short Stories of
Thomas Hardy* (1982)、Martin Ray の *Thomas Hardy: A Textual Study of the Short
Stories* (1997)、Sophie Gilmartin と Rod Mengham の *Thomas Hardy's Shorter Fiction:
A Critical Study* (2007) などであるが、どれもいささか古い。単独の短編小説の
評論もあるが、特定の有名な作品が扱われることが多いと思われる。このよ
うな状況の中で2017年に出版された本書は、アメリカ、イギリス、インド、
日本、ブラジルの大学の10人の研究者による Hardy の短編小説についての
本格的な論集である。著者たちのそれぞれが作品を選び様々な方法で論じた
本書は、久しく待たれていた研究書と言えよう。

本書の構成は、Part I Periodical publication (第1、2論文) Part II Gender
relationships (第3、4、5論文) Part III Community relationships (第6、7論文) Part
IV Narrative technique (第8、9、10論文)となっている。4部ともすでに Hardy
研究では馴染みのある視点であり、それらが短編小説の研究にどのように応
用されているか、読者は興味をそそられる。以下、各論文の概要を示したい。

第1論文 Neither tales nor short stories? issues of authorship, readership, and
publishing in *A Group of Noble Dames* では *A Group of Noble Dames* の改変が辿
られる。すでに知られているように、1890年に第2話から第7話までが *the*

*Graphic*に掲載されたとき、Hardy は多くの削除修正を要求された。しかしその後 1891 年に本として出版された版では、元原稿が完全に復活したわけではないと著者 Graham Law は主張する。この版では多くの加筆修正がなされたが、その中には性的により明白な表現になっているが、それがかえってウェセックス博物古物研究会のメンバーの登場人物たちへの冷笑的な態度を感じさせ、その結果読者も登場人物たちに共感しにくくなっているものもある。また追加された第 1、8、9、10 話では、浮気な少女から貞淑な妻に変貌したり、性的衝動と共に道徳や宗教に影響される貴婦人たちが登場し、他の 6 つの話の中の性的に大胆な貴婦人たちとの間に“jarring disparities of viewpoint and tone” (26) が生じている。つまり、この版は雑誌版より必ずしも“provocative” (25) とは言い切れないという複雑さを、Law は様々な例をあげながら丁寧に証明している。

第 2 論文 “Moonlight nights”: Hardy, Christmas, and the *Illustrated London News* では、この雑誌のクリスマス号に掲載された次の 2 作品が分析される。“What the Shepherd Saw”の羊飼いの少年がクリスマスの夜、「悪魔の門」と呼ばれるドルイド教の三石塔で目撃するのは、公爵が妻の不倫相手と誤解した若い男を惨殺する場面である。しかも羊飼いは公爵を神のごとく恐れ敬い、殺人を口外しないと誓い、彼の財力で教育を受け、彼の執事となる。また“The Son’s Veto”という題名は、クリスマスと関連する息子イエス・キリストを想起させよう。しかし、母の再婚を頑なに拒絶して彼女を失望と孤独の中で死に追いやるこの作品の息子 Randolph には、教会や聖職者への Hardy の批判が示されている。両作品とも、一見クリスマスにふさわしいセッティングでありながら、意外な内容で読者の期待を裏切っていることが説明されている。

第 3 論文 “Getting life-leased at all cost”: marriage in Hardy’s late short stories では、1890 年代に書かれた作品における結婚の問題が論じられる。“On the Western Circuit”の Edith は心の通いあわない夫との生活から生じた感情的性的不満を、Anna の手紙を代筆することによって満たしていくが、それにより最終的に Raye と Anna というもう一組の不釣り合いな結婚を生み出す。

“The Son’s Veto”の Sophy は息子の犠牲になるだけでなく、紳士の妻、未亡人、母という役割の犠牲にもなる。有能なメイドであった彼女は司祭と結婚した途端、仕事を奪われ幼子のように何もできない、何も決められないことを要求される。Sam とのロマンスの背後には、無為に時を過ごすしかない彼女の、目的のある人生を再び送りたいという欲求がある。Sophy の憂鬱と不満を極端にした例が“An Imaginative Woman”の Ella である。彼女の想像力が旺盛になるのは、娘時代ではなく愛のない結婚をしたのちである。彼女は夫にも子供にも関心が持てず、ついには現実からも離れていく。これらの作品で不幸な結婚を描いても、Hardy は長編小説の場合ほど批判されなかった。そこに、Hardy にとっての短編小説というジャンルの重要性があったとされる。

第 4 論文 Pregnant by a portrait: the dynamics of desire for Hardy’s “Imaginative Woman”では映画理論を使いながら“An Imaginative Woman”が分析される。女性を見る男性ではなく、男性の写真を見る女性の欲望の軌跡を描くこの作品において、Hardy は現代の映画批評家たちを先取りしていると著者 Deborah Manion は主張する。詩人になりたいという野心を持つ Ella は、写真の中の Trewe に詩人仲間として憧れ、彼の詩を手本としてまね、さらには彼を乗り越えたいライバルとみなす。しかし、自分の詩才は彼のそれに到底及ばないと自覚し、性別の違いを認め、女性として彼に魅せられる。Ella にとって Trewe は自分と同じ感情や考えを持つ“self-same”な人物であり、かつ“intimate” (77) な恋人でもある。彼のベッドに横たわった彼女は、彼が詩句を壁に書いたという行為を自分も繰り返し、同時に自分の体に彼の魂が行き渡ったように感じる。このような彼女の Trewe との同一化と彼への欲望の複雑な交錯がこの作品の特徴である。

第 5 論文 “Imaginative sentiment”: love, letters, and literacy in Thomas Hardy’s shorter fiction では“On the Western Circuit”における手紙がテーマとなる。都会出身の弁護士 Raye が田舎娘 Anna を気軽な遊び相手から結婚相手と見做すようになったのは、Anna の名の付いた手紙が、彼女が都会のレディたちと

は反対の慎ましく魅力的な女性であるという印象を彼に与えたからである。しかしこの手紙は、Anna が彼の関心を引き、それを持続させるためにはどのようなラブレターが効果的かを知っていた Edith が書いたものであり、彼はこの手紙が作り上げる偽りの Anna を愛する。同時に Edith も言葉が作り上げた Raye に魅了されていき、代筆に歯止めが利かなくなる。長編小説の手紙論で有名な Karin Koehler は、この短編小説でも手紙が虚偽、自己欺瞞、誤読に満ちたものであることを詳細に示しており、読み応えがある。

第6論文 Hardy and humor: the mores of Wessex はユーモアについての論文である。Hardy は人間の愚かさや過ちを描いて読者の笑いを誘うが、それは多くの場合軽蔑を含んだ露骨な笑いではなく、憐れみと思いやりのある笑いであるという前提のもとで、この論文では彼の短編小説のユーモアが次のように分類されている。善良な助任司祭が玉ねぎの匂いに堪えかねて伝声管にハンカチを落とし、Chundle 婆さんがそれを吹き上げるという場面は、ばかばかしい明るいおかしきで farce である。村人たちにとって密輸がいかにか切かを理解できない Stockdale の堅苦しさのおかしさは、satire と humor の組み合わせである。この “lighthearted” (119) なユーモアに対して、“Fellow-Townsmen” のユーモアは “dark” で “grotesque” (118) と評される。特に溺れた妻を見殺しにするように主人公に勧める悪意ある医者 Charlson はその典型とされる。このように明るいユーモアから暗いユーモアまでを使い分けながら、Hardy は人間の複雑さを描き出していると結論付けられる。

第7論文 Love, deception, and disguise in *A Few Crusted Characters* は、この短編の中の9つの話を分析した珍しい論文である。9つの話は長さがまちまちだが、互いに密接に結びついている。まず、多くの話で愛というテーマが共通している。恋人たちの愛は第1話の Tony Kytes と3人の女性たちのように喜劇的にも、第2話の Stephen と Olive のように悲劇的にも語られる。第3話には William の息子への愛が、第7話には愛する息子を失った Palmley 夫人の復讐が描かれる。第5、6話では聖歌隊の楽団員たちの間の思いやりと友情が強く感じられる。死もまた共通のテーマである。第2話の Stephen と

Olive は溺死し、第3話では William の死にまつわる不思議な出来事が語られ、第7話では Jack Winter が不当に厳しい法により死刑となる。聖歌隊の消滅(第6話)のような共同体の伝統の死も語られる。さらには欺瞞と偽装も各話をつなぐモチーフになっている。第5話の楽団員に化けた Andrew、第8話の Jack と服を交換して彼に罪を被せた脱走兵、第9話の死んだおじが権利書にサインしたように見せかけた Netty など抜け目なく生きる人々が登場する。9つの話をそれぞれのテーマや雰囲気や登場人物たちのつながりを考慮して配置している Hardy の巧みに気づかされる論文である。

第8論文 “To correct the misrelation”: reading Hardy’s *Wessex Tales* では、“The Three Strangers” と “The Withered Arm” の誤読がテーマとなる。著者 Neelanjana Basu は両作品の中には多くの “reading model” あるいは “discourse” (143) が示され、読者はどれが正しいのか決めなければならない立場に置かれると述べている。“The Three Strangers” では、羊飼いの家に集まった客たちは、3人の見知らぬ訪問者の話し言葉、容姿、服装、態度などから彼らがどのような人物かを読み取ろうとするが、これらの手掛かりを正しく理解できず、3番目の訪問者を囚人だと全員が誤解する。“The Withered Arm” では、Rhoda は夢の中の Gertrude を魔女と思い、Gertrude は Rhoda を魔女と思い、召使いや乳搾り女たちも Rhoda を魔女と噂する。しかしテキストはどちらも魔女であるとは言っていない。二人は農場主 Lodge に性的、経済的に搾取され、不当にも社会から排除された同じ立場の女性たちなのである。Hardy のこれらの作品における態度は呪い師 Trendle のそれに近いと Basu は言う。Trendle は自分の魔力は大したことないと述べ、コップの中の水に浮かぶ卵の自身を Gertrudeに見せても、決定的なことは何も教えない。同様に、Hardy もこれらの作品の中で確定的な答を明らかにせず、読者に安易な解釈を許さないのである。

第9論文 Representations of the body in Hardy’s *Life’s Little Ironies* では、この短編集の4つの作品の中の女性の肉体に焦点があてられる。著者 Carolina Paganine は精神と肉体を分けて描いていた19世紀の伝統的な語りとは異なり、Hardy はこの二つを密接に関連させていることを強調する。例として “The

Son's Veto”の冒頭の Sophy の髪描写をあげてみよう。彼女の栗色の髪はきっちりと編まれ、巻き上げられ、後ろから男性の目によって興味深く眺められる。これは彼女が常に男性や社会に監視され支配されている状況を暗示する。そしてその髪は美しく結われていても多少野暮ったくもあり、田舎出身でありながら紳士の妻となっている彼女の状況を象徴する。しかもそのせっかく結われた髪は毎晩ほどかれ、努力しても完全なレディになれない彼女の人生のむなしさを表している。このように肉体が、感情や思考や悩みや性格など、その人物の内面と分かちがたく結びついていることが、4 人の女性主人公たちについて明らかにされる。

第 10 論文 Hardy's mercurial narrator: “breaking the frame” in “A Changed Man” では、“A Changed Man”が metalepsis という概念を使って読み解かれる。metalepsis とは、たとえば語り手が自分が語っている物語の中に入ってくるように、様々な語りのレベルを横断することである。“A Changed Man”で語り手が語るのは、病人が張り出し窓から見た出来事を語り手に語ったとされる物語であるが、病人はこの物語の中に入ってくるために、彼は登場人物でも語り手でもあり、“active”でも“passive”(188)でもある。また、語り手の視点は病人の視点と重なり合ったり、ずれたりを繰り返す。このような状況が生まれる背景には subjectivity とは何かという問いがあると著者 Keith Callis は述べている。subjectivity とは与えられたものかそれとも作られたものか、確固としたものかそれとも変化するものなのか、この作品は問うているのである。

概要を並べただけでも、10 の論文がいかにバラエティに富んでいるかが明らかであろう。著者たちの経歴を見ると、比較的若い研究者が多いように思われる。そのせいか、たとえば映画理論や metalepsis を使った論文は、正直なところ読み易くはないが、新しいタイプの研究の可能性を示している。クリスマス号という雑誌の特殊性から作品を読もうとする論文も興味深い。これまであまり注目されなかった *A Few Crusted Characters* の構成についての

論文も、新たなテーマを掘り起こしている。その一方で、結婚や手紙や肉体の表象といった従来の Hardy 研究で論じられてきたテーマが、短編小説にも通用すると再確認することもできる。なぜ本書に *New Perspectives* という副題がついているのか、10 の論文のそれぞれが私たちに理解させてくれると思う。

ただし、気になる点はいくつかの論文で作品のプロットの説明が多いことである。たとえば第 6 論文では作品の中のどこにどのようなユーモアがあるのかを解説するためにプロットを詳しく紹介する必要があるのはわかるのだが、すでに作品を読んでいる読者はいささかくどいという印象を受ける。また、本書で取り上げられているのは、“An Imaginative Woman”、“On the Western Circuit”、“The Son's Veto”、“The Withered Arm”、“The Fiddler of the Reels”といった有名な作品が多い。もちろんこれらの作品は出来栄もよく、論文が書きやすいのであろうが、Hardy の短編小説は 50 近くあるのだから、本書もそのうちのごく一部を扱っているに過ぎない。まだ手付かずの作品がかなり残っていることを改めて感じさせる著書でもある。

日本ハーディ協会会則

1. 本会は日本ハーディ協会（The Thomas Hardy Society of Japan）と称する。
2. 本会はトマス・ハーディ研究の促進、内外の研究者相互の連絡をはかることを目的とする。
3. 本会につぎの役員をおく。
(1) 会長 1 名 (2) 顧問若干名 (3) 幹事（各種委員長及び会計）若干名 (4) 運営委員 (5) 会計監査
4. 会長および顧問は運営委員会が選出し、総会の承認を受ける。運営委員は会員の意志に基づいて選出されるものとする。運営委員会は実務執行上の幹事を互選し、総会の承認を受ける。会長および顧問は職務上運営委員となる。役員の任期は 2 年とし、重任を妨げない。ただし、顧問の任期は特に定めない。
5. 幹事は会長をたすけて会務を行う。
6. 本会はつぎの事業を行う。
(1) 毎年 1 回大会の開催 (2) 研究発表会・講演会の開催
(3) 研究業績の刊行 (4) 会誌・会報の発行
7. 本会の経費は会費その他の収入で支弁する。
8. 本会の会費は年額 4000 円（学生は 1000 円）とし、維持会費は一口につき 1000 円とする。
9. 本会に入会を希望する者は申込書に会費をそえて申し込まなければならない。
10. 本会は支部をおくことができる。その運営は本会事務局に連絡しなければならない。
11. 本会則の改変は運営委員会の議をへて総会の決定による。

附則 1. 本会の事務局は当分の間近畿大学におく。

2. 本会の会員は会誌・会報の配布を受ける。

（2020 年 10 月改正）

編集委員

石井 有希子 金子 幸男
宮崎 隆義 並木 幸充
渡 千鶴子 新妻 昭彦 (委員長)

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報第 47 号

発行者 金子 幸男

印刷所 中央大学生生活協同組合

2021 年 9 月 10 日 印刷

2021 年 9 月 15 日 発行

日本ハーディ協会

〒 577-8502 東大阪市小若江 3-4-1

近畿大学経営学部 高橋路子研究室内

